

恵庭市  
ルルマップ15遺跡

一般国道36号恵庭市恵庭バイパス工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成8年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



1. 調査前状況(NE→SW)



2. 調査区西側完掘状況(NW→SE)



1. 包含層調査状況(SE-NW)



2. 包含層遺物出土状況(NE-SW)



1. 包含層出土の石器  
(石鏃)



2. 包含層出土の石器  
(石斧・すり石・砥石)



3. 包含層出土の土製品  
(土製円盤)



ルルマップ15遺跡 周辺の空中写真(1975年撮影)  
(これは国土地理院発行の8,000分の1を複製したものである)

恵庭市  
ルルマップ15遺跡

一般国道36号恵庭市恵庭バイパス工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成8年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

## 例 言

1. 本書は、一般国道36号恵庭市恵庭バイパス工事（道路拡幅工事）にともない、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成8年度に実施した、ルルマップ15遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

本遺跡の地番は北海道恵庭市西島松<sup>モツカハダノモトノシロシマツ</sup>598-7番地である。

2. 調査は、第2調査部第3調査課が担当した。
3. 本書の作成・編集は、立川トマス、末光正卓、山中文雄が行った。
4. 石器等の石材鑑定は、第1調査部資料調査課花岡正光が行った。
5. 出土資料は、恵庭市教育委員会で保管する。
6. 調査にあたっては、下記の機関および人々のご協力、ご助言をいただいた。

恵庭市教育委員会 恵庭市郷土資料館 上屋真一・松谷純一・森 秀之・佐藤幾子、北網圏北見文化センター 伊藤 悟・太田敏量、深川市教育委員会 葛西智義、千歳市埋蔵文化財センター、苫小牧市埋蔵文化財センター、札幌市埋蔵文化財センター、平取町教育委員会、芦別市星の降る里百年記念館、北海道開拓記念館

## 記号等の説明

1. 遺構などの表記は以下に示す記号を用いた。

P : 土壌            T P : Tピット

F : 焼土            F・C : フレイク・チップ集中

2. 遺構図の縮尺は、原則として40分の1である。

グリッドの数字ラインはN-57-Eである。図中の方位は磁北方位を表す。

遺構断面図のレベルは標高（単位m）である。

3. 遺構の規模は「確認面での長径×短径/墳底面での長径×短径/確認面からの最大深」（単位m）で示した。焼土に関しては「確認面での長径×短径/確認面からの最大厚」（単位m）で示した。一部破壊されているものは現存長を（     ）で示した。
4. 土壌・焼土の平面形は「確認面」で、Tピットは「確認面/墳底面」で示した。
5. 土層の表記は、基本層序についてはローマ数字で、遺構についてはアラビア数字で示した。
6. 基本層序・焼土の土色は、『新版 標準土色帖』（小山・竹原 1967）を用いた。
7. Tピット覆土などの土層混在状態は、下記のように略号を用いて表した。

A+B : AとBがほぼ同量混じる

A>B : AにBが少量混じる

A>>B : AにBが微量混じる

8. 遺物実測図と土器拓影図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

復元土器 : 4分の1            破片土器 : 3分の1            剥片石器 : 2分の1

礫石器 : 3分の1            土製品 : 3分の1

9. 石器・石製品の大きさは、「最大長×最大幅×最大厚」（単位cm）で記した。



# 目 次

口絵	
例言	
記号等の説明	
<b>I・調査の概要</b>	
1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査に至る経緯	1
4. 遺跡の概要	1
<b>II・遺跡の位置と環境、周辺の遺跡</b>	
1. 位置と環境	5
2. 周辺の遺跡	7
<b>III・調査の方法、遺物の分類</b>	
1. 調査の方法	9
2. 土層の区分	10
3. 土器の分類	13
4. 石器等の分類	14
<b>IV・遺構とその出土遺物</b>	
1. 遺構の概要	17
2. 土壌	17
(1) P-1	17
(2) P-2	18
(3) P-3	18
3. Tピット	19
(1) TP-1	19
(2) TP-2	19
(3) TP-3	21
4. 焼土	22
(1) F-1	22
(2) F-2	22
5. フレイク・チップ集中 (F・C-1)	22
<b>V・包含層出土の遺物</b>	
1. 包含層出土の土器	25
2. 包含層出土の石器	40
<b>VI・まとめ</b>	
引用・参考文献	50
写真図版	51
報告書抄録	

## 目 次

### I. 調査の概要

図I-1 ルルマップ15遺跡の位置 …… 3

### II. 遺跡の位置と環境、周辺の遺跡

図II-1 遺跡周辺の地形 …… 6

図II-2 ルルマップ川流域の遺跡 …… 8

### III. 調査の方法、遺物の分類

図III-1 発掘区の呼称・グリッドの設定 …… 9

図III-2 基本層序柱状模式図 …… 10

図III-3 土層断面図(1) …… 11

図III-4 土層断面図(2) …… 12

### IV. 遺構とその出土遺物

図IV-1-1 遺跡の地形と遺構の位置 …… 17

図IV-2-1 P-1・2・3 …… 18

図IV-3-1 TP-1とその出土遺物 …… 20

図IV-3-2 TP-2 …… 20

図IV-3-3 TP-3とその出土遺物 …… 21

図IV-4-1 F-1・2 …… 23

図IV-5-1 F・C-1出土遺物 …… 23

### V. 包含層の遺物

図V-1-1 包含層出土土器の分布図(1) …… 26

図V-1-2 包含層出土土器の分布図(2) …… 27

図V-1-3 包含層出土の土器(1) …… 29

図V-1-4 包含層出土の土器(2) …… 30

図V-1-5 包含層出土の土器(3) …… 33

図V-1-6 包含層出土の土器(4) …… 34

図V-1-7 包含層出土の土器(5) …… 35

図V-2-1 包含層出土土器の器種別分布 …… 41

図V-2-2 包含層出土の石器 …… 42

### VI. まとめ

図VI-1 石器分布図 …… 48

## 表 目 次

### II. 遺跡の位置と環境

表II-1 ルルマップ川流域の遺跡 …… 7

### IV. 遺構とその出土遺物

表IV-2 土壌一覧 …… 23

表IV-3-1 Tピット一覧 …… 23

表IV-3-2 遺構出土破片掲載土器観察表 …… 23

表IV-4 焼土一覧 …… 23

表IV-5 F・C-1掲載石器 …… 23

### V. 包含層出土の遺物

表V-1-1 包含層出土 復元掲載土器観察表 …… 37

表V-1-2 包含層出土 破片掲載土器観察表 …… 37

表V-2 包含層出土掲載石器一覧 …… 43

## 図 版 目 次

- 口絵 1-1 調査前状況  
口絵 1-2 調査区西側完掘状況  
口絵 2-1 包含層調査状況  
口絵 2-2 包含層遺物出土状況  
口絵 3-1 包含層出土の石器 (石鏃)  
口絵 3-2 包含層出土の石器 (石斧・すり石・砥石)  
口絵 3-3 包含層出土の土製品 (土製円盤)  
口絵 4 ルルマップ15遺跡周辺の空中写真
- 図版 1-1 調査前状況  
図版 1-2 調査区西側完掘状況  
図版 1-3 全完掘状況  
図版 2-1 包含層調査状況  
図版 2-2 包含層遺物出土状況  
図版 2-3 K~M杭間土層断面  
図版 2-4 46~48杭間土層断面  
図版 3-1 TP-1・2 完掘  
図版 3-2 TP-3 完掘  
図版 3-3 TP-1 土層断面  
図版 3-4 TP-2 土層断面  
図版 4-1 P-1 完掘  
図版 4-2 P-2 土層断面  
図版 4-3 P-2 完掘  
図版 4-4 P-3 土層断面  
図版 4-5 P-3 完掘  
図版 4-6 F-2 焼土断面と範囲  
図版 5-1 TP-1・3 出土の土器  
図版 5-2 F・C-1 出土の石器  
図版 5-3 包含層出土の土器 (I群)  
図版 5-4 包含層出土の土器 (I群)  
図版 5-5 包含層出土の土器 (I群)  
図版 5-6 包含層出土の土器 (I群)  
図版 5-7 包含層出土の土器 (III群)  
図版 5-8 包含層出土の土器 (I群)
- 図版 6 包含層出土の土器 (I群)  
図版 7 包含層出土の土器 (I群)  
図版 8 包含層出土の土器 (I群)  
図版 9 包含層出土の土器 (I群)  
図版10 包含層出土の土器 (I:土製円盤・押型文土器・II群)  
図版11 包含層出土の土器 (III群)  
図版12 包含層出土の土器 (III群)  
図版13 包含層出土の土器 (V群)  
図版14 包含層出土の土器 (I群)  
図版15 包含層出土の土器 (III・V群)  
図版16-1 包含層出土の石器 (石鏃)  
図版16-2 包含層出土の石器 (石錐・つまみ付きナイフ・スクレイパー)  
図版16-3 包含層出土の石器 (石斧・すり石・砥石)

# I. 調査の概要

## 1. 調査要項

事業名：一般国道36号恵庭市恵庭バイパス工事

(道路拡幅工事) 用地内埋蔵文化財発掘調査

事業委託者：北海道開発局札幌開発建設部

事業受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

遺跡名：ルルマップ15遺跡 (北海道教育委員会登録番号：A-04-114)

所在地：恵庭市西島松598-7

調査面積：1,700㎡

調査期間：平成8年9月17日～平成9年3月25日(発掘期間：9月17日～10月31日)

## 2. 調査体制

理事長 伊藤 一夫

専務理事 佐藤 哲人

常務理事 柴田 忠昭 木村 尚俊

業務部長 山内 清志

調査部長 畑 宏明 (第1調査部) 鬼柳 彰 (第2調査部)

監査等調整課長 佐川 俊一

主 査 立川トマス (発掘担当者)

文化財保護主事 末光 正卓 (発掘担当者)

# 山中 文雄

## 3. 調査に至る経緯および調査経過

一般国道36号恵庭バイパス (北柏木町～戸磯間、総延長8.24km) は、昭和61年に恵庭市の市街中心部を通過する国道36号の交通渋滞を緩和するために事業化され、昭和62年に工事が着工された。バイパスは、平成8年10月に完成、供用されている。

工事用地にかかる周知の遺跡は、隣接するものも含め西島松1遺跡をはじめとし合計8カ所あったが、所在確認調査の結果から柏木川11遺跡、ユカンボシE4・E5遺跡の3遺跡が調査対象となった。柏木川11遺跡の調査結果については、平成元年度に恵庭市教育委員会から、報告書『柏木川11遺跡』が刊行されている。また、ユカンボシE4・E5遺跡については当センターから、報告書『ユカンボシE4遺跡』北埋調報75)、『ユカンボシE5遺跡』北埋調報81)を刊行済みである。

ルルマップ15遺跡は、北柏木側の恵庭バイパスと国道36号が接続するところから300m程北に位置する。平成7年11月に北海道教育委員会による範囲確認調査が行われ、縄文時代早期と前期の遺物、遺構が確認された。この調査により、今回の発掘調査が実施された。

## 4. 遺跡の概要

遺跡は、恵庭市街の北西約4km、ルルマップ川右岸の低位段丘上に位置する。ルルマップ川は、支筋軽石流堆積物台地を流れる河川の一つで、自衛隊演習場内の水無沢付近を水源池とし、穂栄地区で柏木川と合流、北島地区で千歳川に注ぐ延長約9.9km、幅2m程の小河川である。

調査区は、このルルマップ川が開析した支筋軽石流堆積物台地上の北東に向かって傾斜する緩斜面上に立地する。標高は約45～50mである。調査区の中央部と北西側境界付近に、沢地形が認められる。中央部から南端にかけての平坦部は削平がみられる。

遺跡内の基本土層は、Ⅰ層（盛土）、Ⅱ層（耕作土）、Ⅲ層（樽前a降下軽石）、Ⅳ層（黒色土）、Ⅴ層（茶褐色土、漸移層）、Ⅵ層（黄褐色土、漸移層）、Ⅶ層（支笏軽石流起源のローム二次堆積物）、Ⅷ層（支笏軽石流起源のローム層）の順である。

遺構は、土壇3基、Tピット3基、焼土2カ所、フレイク・チップ集中1カ所が確認された。Tピットはすべて溝状の平面形を呈するもので、ほぼ同一の長軸方向を示す。

遺物は、土器4,550点、土製品2点、石器等4,610点、合計9,162点が出土した。土器は、縄文時代早期・同前期・同中期・同晩期のものが出土している。縄文時代早期の東銅路Ⅲ式・同Ⅳ式が多く、ほかに中期のサイベ沢Ⅶ式、萩ヶ岡1・2式、晩期のママチ遺跡Ⅱ黒層出土の土器に相当するものなどがある。石器は、石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、すり石、砥石等が出土している。

遺構・遺物一覧(遺物は破片点数)

遺 構		遺 物	
土 壇	3	土 器	4,550
Tピット	3	土 製 品	2
焼 土	2	剥 片 石 器	43
F・C-1	1	礫 石 器	42
		剥片・砕片	4,491
		礫	34
合 計	9	合 計	9,162



図 I-1 ルルマップ15遺跡の位置 (この図は国土地理院発行の5万分の1  
地形図「重蔵」の一部を複製したものである。)

## II. 遺跡の位置と環境、周辺の遺跡

### 1. 位置と環境

#### 遺跡の位置

本遺跡が所在する恵庭市西島松地区は、市域の東部に位置する。地区の東側をJR千歳線が走り、西側を国道36号と北海道縦貫自動車道が並走する。南側には国道36号恵庭バイパス、北側は島松川を境に北広島市と接する。地区の中央をルルマップ川が、南側を柏木川が北東方向へ流れる。

本遺跡はJR島松駅から西南西へ約2.4km、ルルマップ川右岸の台地と国道36号が交差する地点に位置する。台地の標高は約45～50m、調査区の北側は崖となっており、川との比高は約5mである。

#### ルルマップ川

ルルマップ川は陸上自衛隊島松演習場内の水無沢付近を水源とし、流路9.9km、川幅約2mの小河川である。並行して流れる島松川、柏木川などと同じく北東方向へ流れ、国道36号、北海道縦貫自動車道、JR千歳線をくぐり、恵庭市穂栄で柏木川と合流する。

流域には本遺跡も含めて16箇所の遺跡が確認されているが、発掘調査が行われたのは今回が初めてである。

#### 遺跡が立地する台地

本遺跡が立地する台地は、約40,000年前とされる支笏軽石流堆積物（Spfl）と、その後の恵庭a層下軽石などを取り込んで流れてきたローム層（支笏軽石流堆積物起源）の二次堆積により、骨格が形成された。このようにして形成された台地を開析してきた河川の一つがルルマップ川である。

付近の露頭観察では、淘汰の悪い支笏軽石や二次噴気孔、支笏溶結凝灰岩が見られ、軽石流の凄まじさを今に伝える。支笏溶結凝灰岩は採石場所によって島松軟石、札幌軟石とも呼ばれ、加工が容易なため明治期より建造物の石材としてさかんに用いられた。

#### 国道36号の歴史

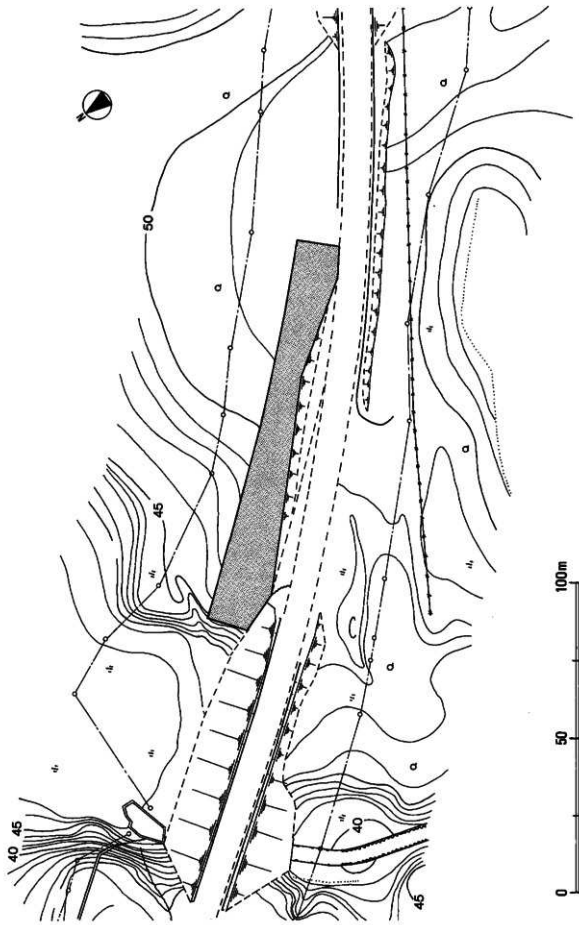
国道36号は、明治6（1873）年に日本初の洋式馬車道である札幌本道（函館～札幌）として開通するが、その祖型は江戸期の場所請負人たちが開削したものである。文献史料から当時の遺跡付近の様子をみると、安政4（1857）年『入北記』に「又行く事二里半斗にして坂あり、険にして馬行叶わざる程なり。是を下りて即シママップ川に至る。」、同5年『西蝦夷日誌』に「過て九折を下り（十町余）、シママップベツ（川幅五、六間、橋あり、南に小休所あり）、川中を以て境とす。（中略）是より千歳領なり。九折鼻を衝計の峻を上り、上に平地有。茅野過てロロマップ（小川、）とあり、曲がりくねった険しい路があったことを記している。

札幌本道の開通に伴い、運送と宿泊の便をはかるため、旧千歳郡島松村に島松駅所が設置された。現在の位置に移設されたのは、明治17（1884）年に中山久蔵が駅運取扱となってからである。中山は明治4（1871）年に島松へ入植、同6年には稲作を試みて成功し、道央の稲作の先駆者として有名である。

その後、札幌本道は大正9（1920）年に国道28号と改められるが、明治後半頃からの「室蘭街道」という通称が長く用いられた。昭和28（1953）年、現行の国道36号と改められ、札幌～千歳間に北海道内初の本格的アスファルト舗装道路が完成し、「彈丸道路」の名で知られた。国道36号は、路線平均交通量が非常に多く、今や北海道経済の大動脈的役割を果たすに至っている。

#### 地名の由来

本遺跡が所在する西島松は昭和36（1961）年からの行政字で、それ以前は旧恵庭町大字島松村の一



図Ⅱ-1 遺跡周辺の地形



部であった。「島松」という地名はアイヌ語の「shuma-oma-p」に由来し、意味は「石・ある・もの」である。この付近は前述したように島松軟石の産地である。

「ルルマップ」という地名もアイヌ語であろうが、転訛のため意味がよくわからない。『恵庭市史』（渡辺 1979）には、「ルルマップ Ruru-map 魚を捕獲するまるく長い大きな矢来かごを仕かける場所の意。一説には坂と沢の意といい、別説には魚の集まるわきつぼの意という。」と紹介されている。

国道36号を札幌から恵庭に向かうと、島松川付近とルルマップ川付近にそれぞれ大きな坂がある。アイヌ語地名は地形に関することを表すものが多い。「ru-o-oma-p」と解すれば「路・そこから・ある・もの」となる。島松からルルマップにかけては、曲がりくねった険しい路であったことを前述した。ルルマップは本来、歩きやすい路が始まるころというような意味だったのではないだろうか。

## 2. 周辺の遺跡

図Ⅱ-2は、恵庭市教育委員会作成の埋蔵文化財包蔵地調査カードと『恵庭市史』（渡辺、1979）などをもとにして作成した、ルルマップ川流域とその周辺の遺跡分布図である。ここでは、とくにルルマップ川流域の遺跡について紹介する。

恵庭市内を流れる河川の多くは、西部山岳地帯に源をもち北東方向に流下し、単独あるいは合流しながら千歳川に流れ込んでいる。これらの河川流域には多くの遺跡が分布しており、恵庭市内における総遺跡数114ヶ所の半数以上を占めている。

ルルマップ川は、支笏軽石流堆積物地帯を開折しながら北東方向に流路をもち、南15号線付近の穂栄地区で柏木川に合流し、千歳川に流れ込んでいる。この川は、延長9.9km、幅2m程の小河川であるが、両岸は侵食により急な段丘崖が形成されている。また、一部には暴れ川であった痕跡である氾濫原も見られる。

遺跡は、このルルマップ川が形成した段丘上に立地し、最下流の下島松地区に位置するルルマップ川12遺跡から最上流のルルマップ15遺跡までの16ヶ所が確認されている。

これら遺跡のうちルルマップ15遺跡を除くルルマップ川1 遺跡から同15遺跡は、昭和47年に札幌大学教授石附喜三男氏他により分布調査で、昭和57年に恵庭市教育委員会が再分布調査を行っている。この調査により、それぞれの遺跡から土器、石器等が採集されている。時期は、すべて縄文時代にあたるが、唯一ルルマップ川10遺跡で続縄文時代の遺物が確認されている（表Ⅱ-1）。

本年度調査したルルマップ15遺跡は、前述の遺跡と異なり、一般国道36号恵庭市恵庭バイパス建設工事（道路拡幅）に伴い、平成7年度に北海道教育委員会が範囲確認調査を行った際に確認されたものである。この流域で確認されている遺跡の中では最上流部に位置する。なお、これより上流域については、自衛隊演習場敷地内となるため、遺跡の所在は不明である。

表Ⅱ-1 ルルマップ川流域の遺跡

番号	遺跡名	登録番号	所在地	概要
1	ルルマップ川1遺跡	A-04-76	恵庭市西島松178, 178-1	縄文時代早期。土器、石器が出土している。
2	ルルマップ川2遺跡	#-77	恵庭市西島松163-1	縄文時代早期・中期・晩期。土器、石器が出土している。
3	ルルマップ川3遺跡	#-78	恵庭市西島松58	縄文時代。ルルマップ川4遺跡と連関するものと見られる。
4	ルルマップ川4遺跡	#-79	恵庭市西島松58	縄文時代。土器、フレイクが出土している。
5	ルルマップ川5遺跡	#-80	恵庭市西島松138-1・3	縄文時代早期・中期・後期。比較的遺物が多い。
6	ルルマップ川6遺跡	#-81	恵庭市西島松143-1, 144-4, 160	縄文前期・中期。多くの土器、石器が出土している。
7	ルルマップ川7遺跡	#-82	恵庭市下島松777-1	縄文時代。
8	ルルマップ川8遺跡	#-83	恵庭市下島松609-1	縄文時代中期。土器が出土している。
9	ルルマップ川9遺跡	#-84	恵庭市下島松622-1~3	縄文時代。土器、石器が出土している。
10	ルルマップ川10遺跡	#-85	恵庭市下島松377-1, 379-1	縄文時代早期・中期・続縄文時代。多くの土器、石器が出土している。
11	ルルマップ川11遺跡	#-86	恵庭市下島松367	詳細不明。
12	ルルマップ川12遺跡	#-87	恵庭市下島松59-1, 61	縄文時代中期。土器が出土し、掘土操作により、自然的な溝渠を穿っている。
13	ルルマップ川13遺跡	#-88	恵庭市下島松583, 585, 586	縄文時代中期・後期。土器、石器が出土している。
14	ルルマップ川14遺跡	#-89	恵庭市下島松393, 394-1	縄文時代。南18号道路の法面に遺物を露出。土器が出土している。
15	ルルマップ川15遺跡	#-90	恵庭市下島松270, 372-1・3・5, 402	縄文時代早期～晩期。土器、石器が出土している。
16	ルルマップ川16遺跡	#-114	恵庭市西島松596-7	縄文時代早期・中期。遺物。ルルマップ川15遺跡に位置し、1999年発掘調査。本誌



図Ⅱ-2 ルルマップ川流域の遺跡 (この図は国土地理院発行の2万5千分の1  
地形図「東海」【石狩広島】の一部を複製したものである。)

### Ⅲ. 調査の方法、遺物の分類

#### 1. 調査の方法 (図Ⅲ-1)

**発掘区の設定** 現地調査の基本図は、一般国道36号恵庭市恵庭バイパス工事予定図1,000分の1を使用した。発掘区の設定は、以下のようにおこなった。まず、工事予定中央線の杭STA3,400、STA3,500を結び基軸線とした。この基軸に並行する線と直交する線を5m毎に区画して方眼を設定した。基軸線をMラインとし、並行する線にアルファベットを、STA3,400をM-50と呼称し、これから基軸に直交する線にそれぞれ数字を付した。この5mの方眼は、北西端の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称される(例：J-55)。

なお、基軸線に用いた点の平面直角座標は、第四系で STA3,400 : X=-120,705.889、Y=-57,178.768 STA3,500 : X=-120,797.787、Y=-57,139.506である。

**調査予定地の遺跡内容の推定** 北海道教育委員会によって平成7年11月におこなわれた範囲確認調査から、以下のように推定された。

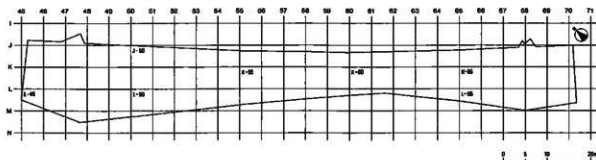
範囲確認調査で、縄文時代早期・同前期とみられる土器、黒曜石の剥片が出土している。調査予定地は、ルルマップ川右岸の舌状台地頂部から南西斜面にかけて立地し、度々の国道改修工事により、良好な包含層の残存は少ないと予想される。また、遺構も存在するが、種類は不明。

**発掘の手順と遺物の取上げ** J-45区から1グリッドおきに調査区全体の4分の1を発掘した(25%調査)。これをもとに遺構・遺物の分布状況を推定し全体の調査に取りかかった。全体の調査は人力による手掘作業で、各調査区ごとにスコップ、移植ゴテ、竹ベラなどを用いて遺物の多寡、土層の変化をみきわめながら行った(包含層調査)。盛土、表土および火山灰については、人力による手掘作業が困難なために、建築用重機を使って除去した。工事工程上の必要から、50ラインより北側に先に調査した。

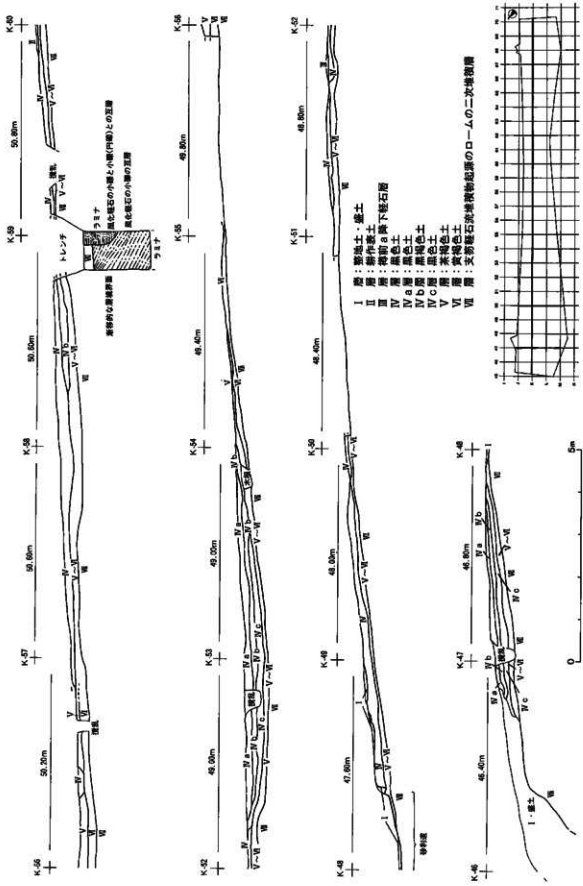
遺物は出土の状況に応じて、位置や土層を記録してから発掘区ごとに取り上げた。とりわけ本来的な遺物包含層と考えられるIV~VI層から検出される遺物については、出土状態の詳細な記録化を行った。微細遺物の密集部分では、土壌の水洗選別によって遺物を回収したところもある(F・C-1)。

**遺構の調査** 25%調査、包含層調査時に土壌、Tピットなどを推定できたときは、その平面形の長軸か短軸方向に土層観察用の土手を残して掘り下げた。想定される墳底面の検出は、土層観察用の土手に接して小さな先行溝を掘るなどして慎重に行った。遺物は、出土状況を記録してから取り上げた。

**遺物整理の方法** 出土した遺物は、野外作業と並行して水洗・注記作業を行った。土器は、小片あるいは微細な物を除いて、大多数の遺物には発掘区と出土層、および取上げ番号を注記した。現地では遺物収集帳点検・補正(遺物台帳作成)、大まかな遺物の分類まで行った。冬期の室内整理作業では、土器の個体識別・接合・復元作業、石器や黒曜石剥片類の接合、土器・石器の実測・製図、集計およびそのほかの記録類の整理を行った。



図Ⅲ-1 発掘区の呼称・グリッド設定図



図五-4 土層断面図(2) Kライン

### III. 調査の方法、遺物の分類

#### 1. 調査の方法 (図III-1)

**発掘区の設定** 現地調査の基本図は、一般国道36号恵庭市恵庭バイパス工事予定図1,000分の1を使用した。発掘区の設定は、以下のようにおこなった。まず、工事予定中央線の枕STA3,400、STA3,500を結び基軸線とした。この基軸に並行する線と直交する線を5m毎に区画して方眼を設定した。基軸線をMラインとし、並行する線にアルファベットを、STA3,400をM-50と呼称し、これから基軸に直交する線にそれぞれ数字を付した。この5mの方眼は、北西端の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称される(例：J-55)。

なお、基軸線に用いた点の平面直角座標は、第二系で STA3,400 :  $X = -120,705.889$ ,  $Y = -57,178.768$  STA3,500 :  $X = -120,797.787$ ,  $Y = -57,139.506$ である。

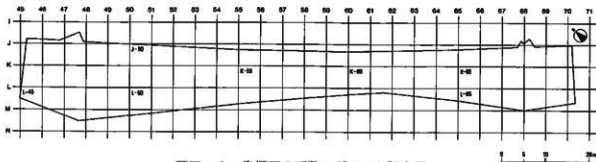
**調査予定地の遺跡内容の推定** 北海道教育委員会によって平成7年11月におこなわれた範囲確認調査から、以下のように推定された。

範囲確認調査で、縄文時代早期・同前期とみられる土器、黒曜石の剥片が出土している。調査予定地は、ルルマップ川右岸の舌状台地頂部から南西斜面にかけて立地し、度々の国道改修工事により、良好な包含層の残存は少ないと予想される。また、遺構も存在するが、種類は不明。

**発掘の手順と遺物の取上げ** J-45区から1グリッドおきに調査区全体の4分の1を発掘した(25%調査)。これをもとに遺構・遺物の分布状況を推定し全体の調査に取りかかった。全体の調査は人力による手掘り作業で、各調査区ごとにスコップ、移植ゴテ、竹ベラなどを用いて遺物の多寡、土層の変化をみきわめながら行った(包含層調査)。盛土、表土および火山灰については、人力による手掘り作業が困難なために、建築用重機を使って除去した。工事工程上の必要から、50ラインより北側に先に調査した。

遺物は出土の状況に応じて、位置や土層を記録してから発掘区ごとに取り上げた。とりわけ本来的な遺物包含層と考えられるIV～VI層から検出される遺物については、出土状態の詳細な記録化を行った。微細遺物の密集部分では、土壌の水洗選別によって遺物を回収したところもある(F・C-1)。

**遺構の調査** 25%調査、包含層調査時に土壌、Tピットなどを推定できたときは、その平面形の長軸か短軸方向に土層観察用の土手を残して掘り下げた。想定される墳底面の検出は、土層観察用の土手に接して小さな先行溝を掘るなどして慎重に行った。遺物は、出土状況を記録してから取り上げた。**遺物整理の方法** 出土した遺物は、野外作業と並行して水洗・注記作業を行った。土器は、小片あるいは微細な物を除いて、大多数の遺物には発掘区と出土層、および取上げ番号を注記した。現地では遺物収集帳点検・補正(遺物台帳作成)、大まかな遺物の分類まで行った。冬期の室内整理作業では、土器の個体識別・接合・復元作業、石器や黒曜石剥片類の接合、土器・石器の実測・製図、集計およびそのほかの記録類の整理を行った。

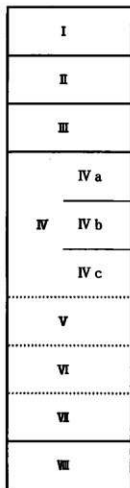


図III-1 発掘区の呼称・グリッド設定図

## 2. 土層の区分 [図Ⅲ-2~4 図版2-3・4]

本遺跡の基本層序は次のように区分した。

- I 層：整地土・盛土 しまりやや強 下層との層境界面は明瞭
- II 層：耕作表土 5YR 3/1 (黒褐色) の粘土質シルトに 5%程度樽前 a 降下軽石混じる  
しまりやや強 下層との層境界面は明瞭
- III 層：樽前 a 降下軽石層 (1739年降下) 長径10mm以下の軽石と火山砂から構成される 下層との層境界面は明瞭
- IV 層：7.5YR 2/1~10YR 1.7/1 (黒褐色) の粘土質シルト しまり中 下層との層境界面は漸移的 ルルマップ川の崖近くでは間層がみられ、次のように細分した。
- IV a 層：7.5YR 2/1 (黒色) の粘土質シルト しまり強 下層との層境界面はやや明瞭
- IV b 層：10YR 2/2 (黒褐色) の粘土質シルト しまり強 下層との層境界面はやや明瞭
- IV c 層：10YR 1.7/1 (黒色) の粘土質シルト しまり強 下層との層境界面は漸移的
- V 層：茶褐色を呈する粘土質シルト 漸移層 しまり中 下層との層境界面は漸移的
- VI 層：黄褐色を呈する粘土質シルト 漸移層 しまり中 下層との層境界面は漸移的
- VII 層：支笏軽石流堆積物起源のロームの二次堆積層 10YR 5/8 (黄褐色) の粘土質シルトに、支笏軽石 (亜円礫) 15%、恵庭 a 降下軽石 (円礫) 5%混じるしまり中 下層との層境界面は明瞭
- VIII 層：支笏軽石流堆積物起源のローム層 10YR 6/6 (橙色) のシルトに支笏軽石40%混じる



I 層からIII層までを重機で除去した。I 層は国道の改修工事等によるものであろう。II 層は樽前 a 降下軽石層以降の地表土と考えられる。軽石が混ざっていることは耕作によるものと考えられる。

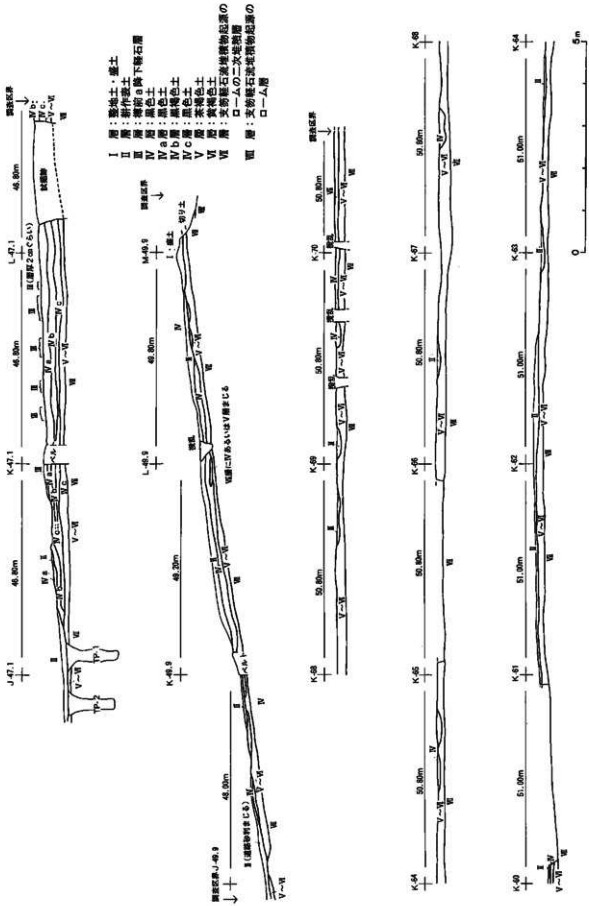
また、III層は堆積が薄くルルマップ川の崖近くのみ分布していた。様々な粒径のものが混在している堆積状況から、二次堆積と考えられる。

IV層、V層、VI層は遺物包含層である。K-60~70ラインでは漸移層の直上にII層が堆積していることから、IV層は削平あるいは流失してしまっていると考えられる。また、54ラインからルルマップ川の崖にかけてのあたりには、IV層中に暗色のうすい間層 (IV b 層) がみられた。どのような性格の土が堆積しているのかは明らかにできなかった。

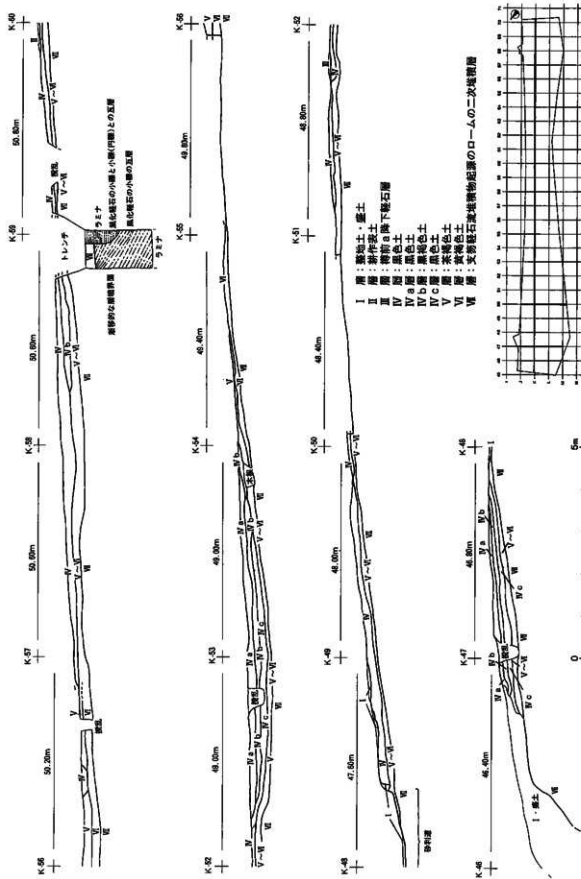
遺物は各時期のものが各層から出土しており、層位的な出土状況は明確に捉えることができなかった。原因は土の削平、流失等によるものと推察される。

VII層、VIII層は無遺物層である。K-69区あたりに深めのトレンチをいれたところ、風化軽石と小礫の互層がみられた。これは台地形成頃の谷が埋没した状況を示すものであろう。

図Ⅲ-2 基本層序柱状模式図



図III-3 土層断面図(1) 47.1ライン・48.9ライン・Kライン



図四—4 土層断面図(2) Kライン



## 3. 土器の分類

I群：縄文時代早期に属するもの

a類：貝殻文、条痕文土器群

b類：東劍路式系土器群

東劍路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式、東劍路Ⅳ式に相当するもの

II群：縄文時代前期に属するもの

a類：縄文尖底土器群

b類：円筒土器下層式、植苗式、大麻Ⅴ式に相当するもの

III群：縄文時代中期に属するもの

a類：円筒土器上層式に相当するもの

b類：天神山式、柏木川式、北筒式に相当するもの

IV群：縄文時代後期に属するもの

a類：余市式、タブコブ式に相当するもの

b類：ウサクマイⅠ式、手稲式、<sup>新</sup>鏡湖式に相当するもの

c類：堂林式、三ッ谷式、御殿山式に相当するもの

V群：縄文時代晩期に属するもの

a類：大洞Ⅱ式、大洞Ⅲ式に相当するもの

b類：大洞Ⅰ式、大洞Ⅳ式に相当するもの

c類：大洞Ⅴ式、大洞Ⅵ式に相当するもの

VI群：統縄文時代に属するもの

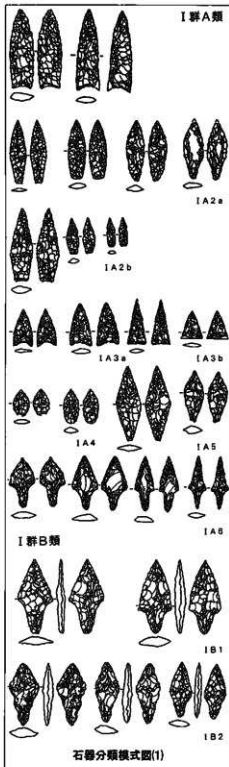
VII群：擦文時代に属するもの

本道跡からは、I群、II群、III群、V群の土器が出土している。

#### 4. 石器の分類

石器等の分類については、定形的な石器をI～IX群に分け、石核・剥片類をXI群とし、定形的な石器と認定しがたい加工度や使用痕のある剥片・礫をX群として、記号を用いて分類をした。分類記号を用いなかったものには、礫や土製品、石製品がある。

なお、XA1, XA2の本文中や一覧表での名称には、R・フレイク、U・フレイクの略称を用いている。



#### 〈I 群〉石鏃・石槍類

##### A 類 石鏃

- 1: 石刃鏃
- 2: 長身で薄身のもの
  - a: 柳葉形のもの
  - b: 五角形になるもの
- 3: 三角形のもの
  - a: 凹基のもの
  - b: 平基のもの
- 4: 木の葉形のもの
- 5: 菱形のもの
- 6: 有茎のもの
- 8: 破片（細分の困難な破片）・未製品など

##### B 類 石槍またはナイフ

- 1: 茎をもつもの
- 2: 茎が明瞭にみられないもの  
(木の葉形・菱形のものを含む)
- 8: 破片（細分の困難な破片）・未製品など

#### 〈II 群〉石鏃

##### A 類 石鏃

- 1: 刺突部を作り出したもの
- 2: 棒状のものにつまみ部が作り出されたもの
- 3: 棒状のもの
- 8: 破片（細分の困難な破片）・未製品など

#### 〈III 群〉つまみ付きナイフ・スクレイパー

##### A 類 つまみ付きナイフ

- 1: 片面全面加工のもの  
(裏面の一侧縁に刃部をもつもの)
- 2: 片面全面加工のもの
- 3: 片面周縁加工のもの
- 4: 両面加工のもの
- 8: 破片（細分の困難な破片）・未製品など

B 類 スクレイパー

- 1: 石べらと称されるもの
- 2: 円形のもの
- 3: 主に縦長で下端部に刃部が設けられるもの
- 4: 素材の縁辺にえぐりを入れ、それを刃部としているもの
- 5: 縦長で、側縁に刃部が設けられているもの
- 6: 素材の形状を大きく変えていないもの
- 8: 破片 (細分の困難な破片)・未製品など

(IV 群) 石斧類

A 類 石斧

- 1: 擦り切り手法によって製作されたもの
- 2: 部分的に磨かれているもの
- 3: 全面磨整のもの
- 8: 破片 (細分の困難な破片)・未製品など

B 類 石のみ

(V 群) たたき石

A 類 たたき石

- 1: 棒状礫を素材としたもの
- 2: 扁平礫を素材としたもの
- 3: 円礫を素材としたもの
- 4: くぼみ石と称されるもの

(VI 群) すり石

A 類 すり石

- 1: 断面が三角形の礫の稜をすったもの
- 2: 扁平礫を素材としたもの
- 3: 扁平礫を半円状に打ち欠きをすったもの
- 4: 円礫を素材としたもの
- 5: 北海道式石冠と称されるもの

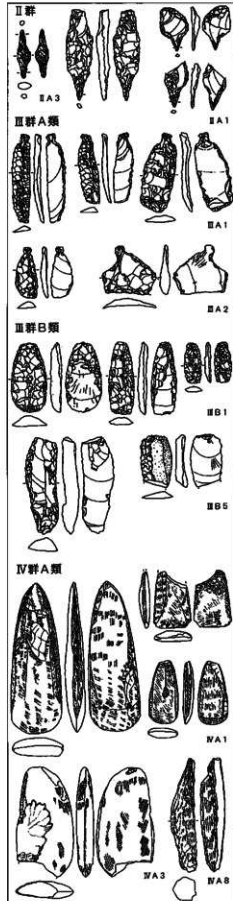
(VII 群) 石鋸、砥石類

A 類 石鋸

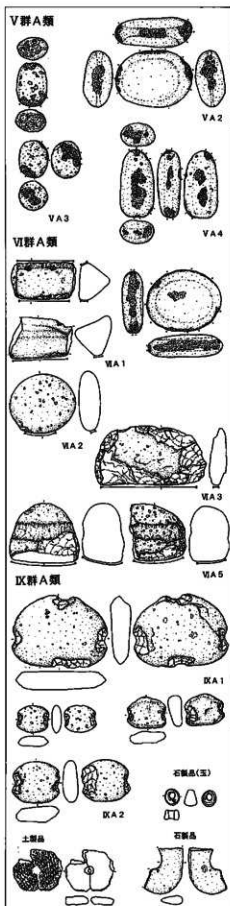
- 1: 石鋸

B 類 砥石

- 1: 研磨面に溝があるもの
- 2: 板状のもの
- 3: 角柱状のもの



石器分類模式図2



石器分類模式図(3)

〈VIII 群〉 台石もしくは石皿

A 類 台石・石皿

〈IX 群〉 石鏝

A 類 石鏝

- 1: 4ヵ所の打ち欠きをもつもの
- 2: 長軸の両端に打ち欠きをもつもの
- 3: 短軸の両端に打ち欠きをもつもの

〈X 群〉 加工痕、使用痕のみられる剥片や礫など

A 類 加工痕、使用痕のみられる剥片

- 1: 剥片に加工痕のみられるもの (R・フレイク)
  - a: ピエス・エスキーユと称されるもの
  - b: 加工痕から器種を特定できないもの
- 2: 剥片に使用痕のみられるもの (U・フレイク)

B 類 加工痕のみられる礫

- 1: 擦り切り底のある礫および礫片
- 2: 意図の不明瞭な加工痕のあるもの

〈XI 群〉 石核・剥片類

A 類 石核・原石

- 1: 石核
- 2: 石器原石と考えられるもの

B 類 破片・砕片

## IV. 遺構とその出土遺物

## 1. 遺構の概要 [図IV-1-1]

今回の発掘調査では、土壌3基（P-1～P-3）、Tピット3基（TP-1～TP-3）、焼土2カ所（F-1、F-2）が検出された。

土壌はK-50、K-59、J-64区に1基ずつ位置し、まともにはみられない。

TピットはTP-1・2が隣接して緩斜面上に位置する。TP-3は平坦面上に位置するが、削平を受けていると考えられる。墳底面はすべて溝状の平面形を呈し、ほぼ同一の長軸方向を示す。TP-1・2とTP-3の間は100m程の距離があるが、大部分は調査区外であったため両者に配列などの関係があったかどうかは判断としない。

焼土はK-62・L-62、J-62区に1カ所ずつ位置する。両者とも焼け方が弱い。

その他、VI層中でフレイク・チップの集中が1カ所（F・C-1）検出された。

本遺跡では遺構からの出土遺物が少なく、包含層では遺物の層位的な出土状況がみられなかった。このため、遺構の明確な時期を決定するまでには至らなかった。

## 2. 土 壌

(1)P-1 [図IV-2-1 表IV-2 図版4-1]

位 置 K-50

規 模  $1.32 \times 1.07 / 0.97 \times 0.73 / 0.24$

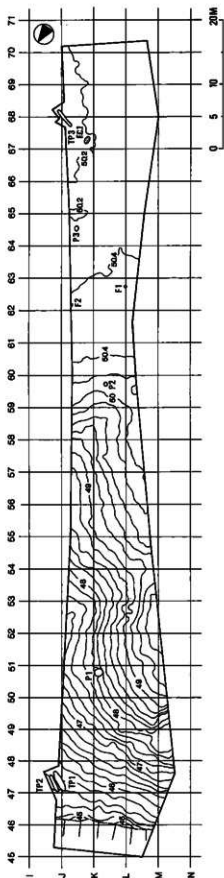
平 面 形 楕円形

確認・調査 北東側斜面の包含層調査終了後、VII層上面で黒色土のまとまりを確認した。半截して土層断面を観察してみたところ、壁、墳底面ともにしっかりしていたことなどから、土壌と判断した。

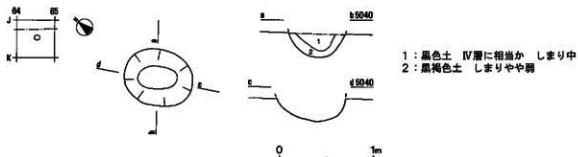
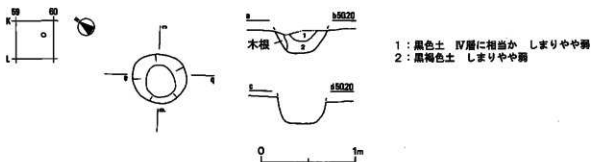
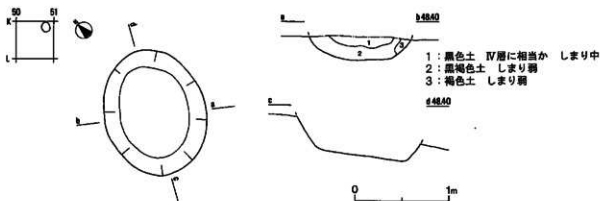
覆 土 第1層はIV層が落ち込んだものであろう。第2、3層はVII層との層境界面が明瞭で、しまりが弱い。

遺 物 遺物の出土はなかった。

時 期 時期の決め手となるものはなく、明確な時期は不明である。



図IV-1-1 遺跡の地形と遺構の位置



図IV-2-1 P-1・2・3

(2) P-2 [図IV-2-1 表IV-2 図版4-2・3]

位置 K-59

規模  $0.51 \times 0.57 / 0.33 \times 0.30 / 0.26$

平面形 円形

確認・調査 包含層調査終了後、VII層上面で黒色土のまとまりを確認した。半截して土層断面を観察してみたところ、壁、墳底面ともにしっかりしていたことなどから、土城と判断した。

覆土 第1層はIV層が落ち込んだものであろう。第2層はVII層との層境界面が明瞭で、しまりが弱い。

遺物 遺物の出土はなかった。

時期 時期の決め手となるものはなく、明確な時期は不明である。

(3) P-3 [図IV-2-1 表IV-2 図版4-4・5]

位置 J-64

規模  $0.72 \times 0.58 / 0.42 \times 0.23 / 0.26$

## 平面形 楕円形

確認・調査 包含層調査終了後、VII層上面で黒色土のまとまりを確認した。半載して土層断面を観察してみたところ、壁、墳底面ともにしっかりしていたことなどから、土壌と判断した。

覆土 第1層はIV層が落ち込んだものであろう。第2層はVII層との層境界面が明瞭で、しまりが弱い。

遺物 第1層から黒曜石のフレイク3点が出土した。

時期 時期の決め手となるものはなく、明確な時期は不明である。

## 3. Tピット

(1)TP-1 [図IV-3-1 表IV-3-1・2 図版3-1・3]

位置 I-47・J-47

規模 3.42×0.86/3.48×0.20/1.44

平面形 長楕円形/溝状

長軸方向 N-62°-W

確認・調査 包含層調査終了後、VII層上面で黒色土のまとまりがみられた。半載して土層断面を観察してみたところ、しまりのない土が1.40m程の深さまで溝状に堆積しており、しっかりした壁、墳底面も確認されたため、Tピットであると判断した。

断面形 長軸断面形は、両壁とも上部がやや急傾斜で、中段からオーバーハングして墳底面に至る。

短軸断面形は、南西側壁の上部が中段までなだらかに傾斜し、そこから急傾斜して墳底面に至る。途中に崩落と思われる痕跡がある。北東側壁の上部もなだらかに傾斜し、中段から急傾斜して墳底面に至る。

墳底面 部分的にやや波打つため、20cm程の高低差がある。杭のような痕跡などはみられなかった。

覆土 第1層はIV層が落ち込んだものであろう。第2、5、11、13、14層は比較的暗色の強い土である。それ以外の層は壁などの崩落土が主体のものであろう。

遺物 第1層から土器1点が出土した。1は磨耗のため拓影図が判然としなが、LRの結束第1種原体が横方向に回転施文されている。底部に近い胴部破片であろう。Ⅲ群に相当すると思われる。

時期 出土した土器はこの遺構に伴うものとは考えがたく、明確な時期は不明である。

(2)TP-2 [図IV-3-2 表IV-3-1 図版3-1・4]

位置 I-47

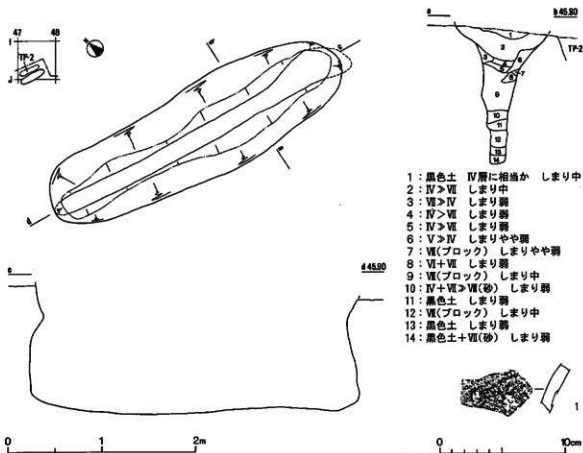
規模 2.80×0.62/2.62×0.16/1.13

平面形 長楕円形/溝状

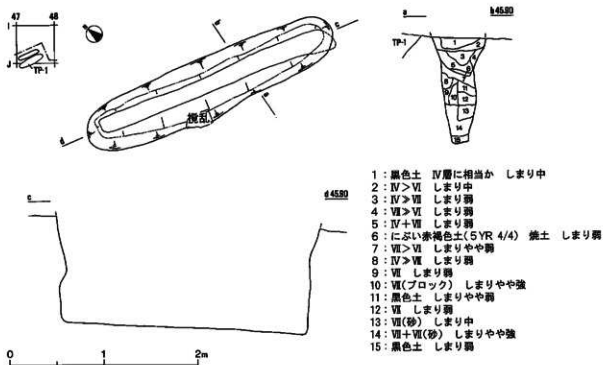
長軸方向 N-55°-W

確認・調査 TP-1と隣接しており、同時に確認・調査した。包含層調査終了後、VII層上面で黒色土のまとまりがみられた。半載して土層断面を観察してみたところ、しまりのない土が1.10m程の深さまで溝状に堆積しており、しっかりした壁、墳底面も確認されたため、Tピットであると判断した。

断面形 長軸断面形は、北西側壁の上部がやや急傾斜で、中段からほぼ垂直に墳底面に至る。南東側壁は、中段下位まで急傾斜し、そこからオーバーハングして墳底面に至る。



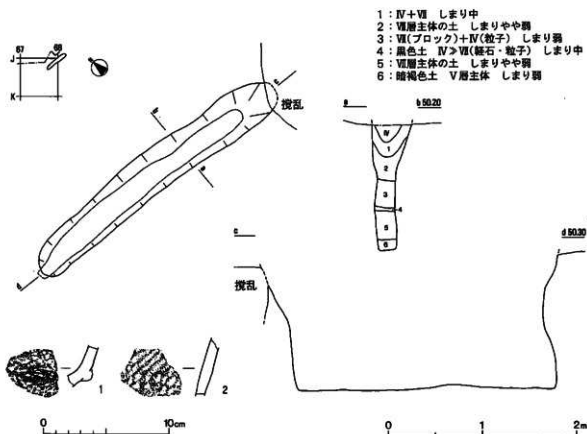
図IV-3-1 TP-1とその出土遺物



図IV-3-2 TP-2



## IV 遺構とその出土遺物



図IV-3-3 TP-3とその出土遺物

短軸断面形は、南西側壁が墳底面に向かって急傾斜する。北東側壁は中段までやや急傾斜し、そこからややふくらんで墳底面に至る。

墳底面 ほぼ平坦であるが、長軸北西側壁に向かってゆるく傾斜し、15cm程の高低差がある。杭のような痕跡などはみられなかった。

覆土 第1層はIV層が落ち込んだものであろう。第2、3、4、15層は比較的暗色の強い土である。第6層は焼土で、範囲は長軸北西側壁から短軸セクションベルト付近にまで及ぶ。それ以外の層は壁などの崩落土が主体のものであろう。

遺物 遺物の出土はなかった。

時期 時期の決め手となるものはなく、明確な時期は不明である。

[3]TP-3 [図IV-3-3 表IV-3-1・2 図版3-2・5-1]

位置 I-67・68・J-67・68

規模 (3.12)×0.44/2.74×0.22/1.36

平面形 溝状/溝状

長軸方向 N-72°-W

確認・調査 包含層調査終了後、VII層上面で溝状を呈する黒色土のまとまりがみられた。半載して土層断面を観察してみた結果、Tピットであると判断した。なお、長軸方向の東側は一部攪乱をうけていた。

断面形 長軸断面形は、西側の壁の中間あたりがふくらむオーバーハング状で、東側は攪乱されているものの崩壊した部分と考えられる痕跡がみられる。短軸断面形は、上部分が若干開くが溝状を

呈する。

横 底 面 概して平坦である。杭のような痕跡などはみられなかった。

覆 土 中位から下位の層はほぼ水平に堆積している。最上位の層はIV層である。第1、4、6層は比較的暗色の強い土である。それ以外の層は壁などの崩落土が主体のものであろう。

遺 物 覆土から土器31点が出土した。これらのうち比較的特徴的な2点を掲載した。1は貼付がなされているものである。底部に近い胴部破片であろう。2はLR原体による縄文土器と斜行縄文が施されている。1・2の時期はともにI群b類であろう。

時 期 出土した土器はこの遺構に伴うものとは考えがたく、明確な時期は不明である。

#### 4. 焼土

(1)F-1 [図IV-4-1 表IV-4]

位 置 K-62・L-62

規 模 (0.42) × (0.18) / 0.08

平 面 形 円形?

確認・調査 包含層調査中、V～VI層で確認した。南東側の攪乱から土層断面を観察してみたところ、厚さ8cm程の焼土を確認することができた。焼土は焼け方が弱くしまりがなかった。

遺 物 遺物の出土はなかった。

時 期 時期の決め手となるものはなく、明確な時期は不明である。

(2)F-2 [図IV-4-1 表IV-4 図版4-6]

位 置 J-62

規 模 0.38 × 0.14 / 0.04

平 面 形 楕円形

確認・調査 包含層調査中、V～VI層で確認した。半截して土層断面を観察してみたところ、厚さ4cm程の焼土を確認したが、焼け方が弱くしまりがなかった。

遺 物 焼土中から黒曜石のフレイク2点が出土した。

時 期 時期の決め手となるものはなく、明確な時期は不明である。

5. F・C-1 [図IV-5-1-1 表IV-5 図版5-2]

位 置 J-67

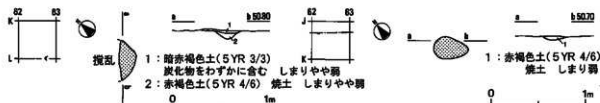
範 囲 東西方向 0.61 × 南北方向 0.93 / 地盤高 49.96 (m)

確認・調査 包含層調査時に、VI層中でフレイク・チップが集中しているのが確認された。微細なものが多量に土壌に混在している状況であった。そこで、フレイク・チップがなくなるまでの範囲を土壌ごと取り上げ、それから範囲と高さを記録した。採取した土壌は、水洗選別により遺物を検出した。

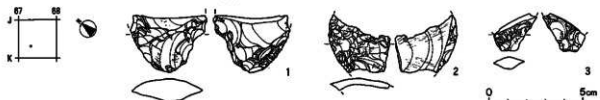
遺 物 土器1点、Rフレイク4点、剥片・砕片3,211点が出土している。1～3はいずれもRフレイク(XA1)である。1・2は、側縁に使用によるとみられる刃部のつぶれが確認された。残存部位からみて、1・2はナイフ、3は石槍の破片と推定される。石質はいずれも黒曜石である。

時 期 時期の決め手となるものはなく、明確な時期は不明である。

## IV 遺構とその出土遺物



図IV-4-1 F-1・2



図IV-5-1 F・C-1出土遺物

表IV-2 土壌一覽

遺構番号	図	図版	発掘区	平面形 (縦断面の長さ×短断面の長さ×厚さ)	規模 (縦断面の長さ×短断面の長さ×厚さ)	遺物	備考
P-1	IV-2-1	4-1	K-50	楕円形	1.32×1.07/0.97×0.73/0.24	—	
P-2	IV-2-1	4-2・4-3	K-59	円形	0.51×0.57/0.33×0.30/0.26	—	
P-3	IV-2-1	4-4・4-5	J-64	楕円形	0.72×0.58/0.42×0.23/0.26	黒曜石フレイク：3	

表IV-3-1 Tピット一覽

遺構番号	図	図版	発掘区	平面形 (縦断面の長さ×短断面の長さ×厚さ)	規模 (縦断面の長さ×短断面の長さ×厚さ)	長軸方向	遺物	備考
TP-1	IV-3-1	3-1・3-3	I-47・J-47	長楕円形/溝状	3.42×0.86/3.48×0.20/1.44	N-62°-W	土器：1	TP-2と隣接
TP-2	IV-3-2	3-1・3-4	I-47	長楕円形/溝状	2.80×0.62/2.62×0.16/1.13	N-55°-W	—	黒土・赤土・緑土・黒土・緑土
TP-3	IV-3-3	3-2	I-67-68・J-67-68	溝状/溝状	(3.12)×0.44/2.74×0.22/1.36	N-72°-W	土器：31	長軸東側壁に一部攪乱

表IV-3-2 遺構出土破片掲載土器観察表

図	掲載番号	出土遺構番号	層位	破片部位	接合破片数	色		内面調整	施文具	胎土	縦線の有無	使用の痕跡	接合同一個体	備考 (別表参照)
						外面	内面							
IV-3-1	1	TP-1	1	覆土 胴部下半	—	橙	にぶい黄褐色	ナデ	縄文原体	粗	あり(中量)	内面黒色化 外面赤色化	—	III群
IV-3-3	1	TP-3	2	覆土 胴部下半	—	橙	淡黄橙	ナデ	縄文原体	粗	なし	—	—	I群
IV-3-3	2	TP-3	1	覆土 胴部	—	明黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	縄文原体	粗	なし	内面に炭化物付着	—	I群

表IV-4 焼土一覽

遺構番号	図	図版	発掘区	平面形 (縦断面の長さ×短断面の長さ)	規模 (縦断面の長さ×短断面の長さ)	遺物	備考
F-1	IV-4-1	—	K-62・L-62	円形?	(0.42)×(0.18)/0.08	—	南東側半分は攪乱
F-2	IV-4-1	4-6	J-62	楕円形	0.38×0.14/0.04	黒曜石フレイク：2	

表IV-5 F・C-1掲載石器

図	番号	名称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ (長さ×幅×厚さcm・重さg)		石質	備考
						長さ	幅×厚さ		
図IV-5-1	1	Rフレイク	XA1	J-67・2	IV	(3.0)×(4.0)×1.2	12.3	黒曜石	
#	2	#	#	#	#	(3.0)×3.3×0.5	3.9	#	
#	3	#	#	#	#	(1.9)×2.2×0.7	1.9	#	

## V. 包含層出土の遺物

### 1. 包含層出土の土器 [図V-1-1-1~1-7 表V-1-1-2 図版5-3~15]

#### (1) 概 要

土器の出土総点数は4,550点(土製品2点含まず)である。包含層出土のものが4,505点、遺構出土のものが33点、表面採集のものが12点である。これらについて個体識別を行い、比較的破片が集まったものについて復元した。

破片掲載土器は、口縁部、底部の破片を抜き出し、胎土、文様等を手がかりに時期分類を行った。そして、これらの中から特徴的と思われるものを掲載した。胴部破片についても同様である。

口縁部の破片について行った時期分類の各点数は、I群142点、II群1点、III群84点、V群40点、未分類46点である。

#### (2) 資料の提示方法

##### 実測図・拓影図

復元掲載土器は、立面実測図を作成した。地文に関しては、施文原体を判別し、模式的に表現している。

破片掲載土器は、拓影図(左側=外面・右側=内面)と断面の実測図を組み合わせて示している。拓影図は以下の原則に基づいている。

1. 口縁部破片は口唇部が無文のものも作成した。
2. 内面は施文がみられるものについてのみ作成した。
3. 底部破片は、底面はすべて、胴部は必要と判断した部分のみ掲載している。

実測図は以下の原則に基づいている。

1. 断面図は、口唇部などの残存状態の良好な部分について実測した。
2. 貼付帯などの粘土のつなぎ目は、確認できたものを図示してある。
3. 割れ口はその形状を図示した。
4. 突起部の破片はその部分を図示してあるが、低い部分の口唇部が残存しているものはそれも図示した。
5. 底部破片は、残存している部分から径を求められるものは復元実測図を作成した。

**観 察 表** 掲載する土器はすべて観察表を作成した。項目は、出土遺構・出土地点・遺物番号・層位・破片部位・接合破片数・計測値(復元掲載土器のみ)・色調・内面調整・施文具・胎土・繊維の有無・使用の痕跡・接合・同一個体・備考(時期分類)である。以下、これらの項目について簡単に説明する。

**出土遺構・出土地点** 遺構出土のものはその遺構名、包含層出土のものはグリッドを記入する。

**遺物番号** 遺物登録台帳の番号を記入する。

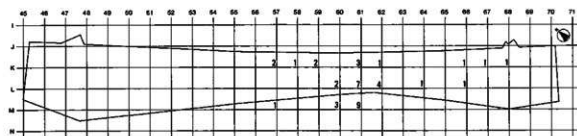
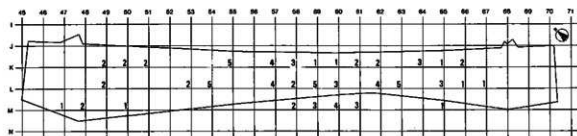
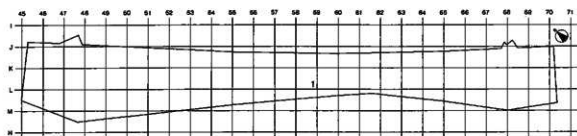
**層 位** 遺構出土のものは床面あるいは覆土、包含層出土のものは基本層序を記入する。

**破片部位** 残存部位を、口縁部、胴部(必要に応じて上半・中・下半)、底部などと記入する。

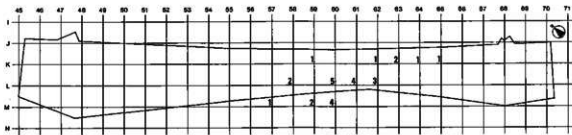
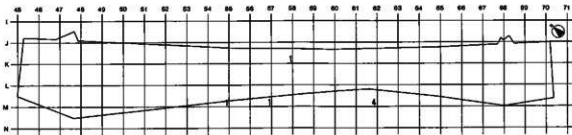
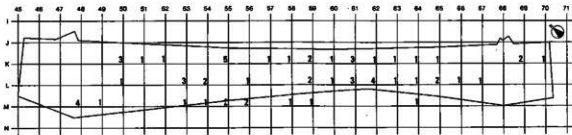
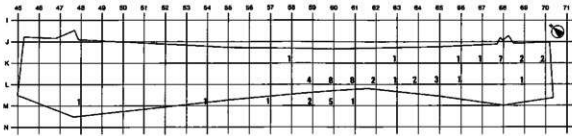
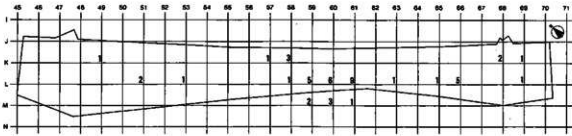
**接合破片数** 接合した破片の総点数を記入する。

**計 測 値** 復元掲載土器について、器高(高さ)、口径(口縁部の直径)、底径(底部の直径)を記入する。すべて残存していない状態のものや推定の度合いの強いものは、丸括弧でくくって記入する。

**色 調** 内外面の色調を『新版 標準土色帖』(小山・竹原 1967)において最も近似する色名を比定する。ただし、マンセル標記法の記号は表記には用いずその色名を記す。



図V-1-1 包含層出土土器の分布図(1)



図V-1-2 包含層出土土器の分布図(2)

内面調整 内面の調整方法を記入する。おもな調整の種類は以下の三つである。

1. ナデ：器面をあて布（皮）や工具などでなでること  
目的 器面の凹凸をある程度少なくする 器面を滑らかにする  
痕跡 とぎれとぎれの細い「すじ」が複数（1単位）ほぼ平行にみられる
2. ミガキ：器面を工具（ヘラ、円礫など）などで丹念に研磨する  
目的 器面を平滑にする 光沢を生じさせる  
痕跡 平滑な面 生じる光沢 器面に沈み込んだ砂粒
3. ケズリ：器面の素地土をヘラなどの工具を用いて削り取る  
目的 器を形作るなど  
痕跡 削り取られた平坦な面（1単位）器面における砂粒の移動

施文具 用いられている施文具の種類を記入する。

胎土 胎土の粗密の度合いを、密・中・粗の3段階に分け記入する。

1. 密：砂がわずかしか含まれないもの
2. 中：長径2.0mm以下程度の砂が比較的多量に含まれるもの
3. 粗：様々な粒径の砂が含まれるもの

その他、指頭圧痕が顕著にみられるものもそれを記入する。

繊維の有無 繊維が含まれているかどうか記入する。相対的な量も記す。

使用の痕跡 器面の黒色化、炭化物の付着、被熱による外面の赤色化、器面の荒れなどを記入する。

接合・同一個体 接合破片のうちで遺物番号等が異なるものについて、出土地点、遺物番号、層位、点数（丸括弧）を記入する。同一個体は掲載分についてのみ記す。

備考（時期分類） 土器の時期分類やその他の事項を記入する。

#### (3)分 布 [図V-1-1・2]

土器の分布図については、総破片数のもの、口縁部の各時期分類（I、II、III、V群、未分類）ごとのもの、底部の各時期分類（I、III、V群、未分類）ごとのものを作成した。

総破片数の分布図では土器の出土は調査区のほぼ全域に認められる。出土点数が多く認められるのは、J-52・K-53区と57～69ラインである。J-52・K-53区とJ-57～K-58～L-59区についてはゆるやかな沢状の地形がみられるところで、分布の多さはそれが理由と考えられる。また、Kラインの60～71までは、土層断面図にあるとおりIV層がみられなかったところである。土の削平や流失の影響によるものと考えているが、分布は多く認められる。

分布がみられないのは45ラインとL-67～71区である。45ラインはルルマップ川の崖下にあたるからで、L-67～71区は土の削平によるものと考えられる。

概していうと、遺物の分布状況は包含層の残存状態に影響を受けているといえよう。

各時期分類ごとの口縁部、底部の分布は、総破片数の分布とほぼ同じような状況を示す。I群は調査区のほぼ中央に最も多く分布している。III群の分布はほぼ全域に認められ特に分布が集中しているところはない。V群の分布に関してはルルマップ川の崖近くには認められない。

#### (4)復元掲載土器 [図V-1-3-1～5]

1と2は同一個体である。口縁部はゆるく開き、底部は丸底である。全体で砲弾形の器形を呈するものである。図面上は別にしてあるが、図上復元による推定器高は約18cmと考えられる。1段LとRを巻きつけた絡糸体による撚糸文が底部まで施されている。

3は丸底の部分である。底部から胴部へは比較的広がるようである。器面にはLRとRL原体による



図V-1-3 包含層出土の土器(1)





図V-1-4 包含層出土の土器(2)

羽状縄文が施されている。条、節ともに細い。

4は底部の破片である。底部の外面と、底面の内面が剥離している。結束第一種の原体による羽状縄文が施されている。節は細長い。

5も底部の破片である。これに関してのみ縮尺が1/3である。若干張り出す底部から胴部へと広がる。胴部にはLR原体による縦走気味の縄文がみられる。張り出す底部の外面には縄端圧痕文が施されている。

1～3は東銅路Ⅳ式、4は円筒土器上層式、5は東銅路Ⅲ式にそれぞれ相当するものと考えられる。

(5)破片縄織土器 [図V-1-3~7-6~125]

I群a類土器 [図V-1-3-6・7]

条痕文の施されたものである。6は口縁部、7は胴部の破片である。ともに内面にも施されている。

I群b類土器 [図V-1-3-8~4-62]

8～22は平口縁のもので、口唇部直下の外面が張り出すものである。

8は器面に組紐原体による圧痕文を施した後、貼付がなされている。この貼付部分上と口唇部には棒状工具による施文がみられる。

9～13は縄線文が施されているもので、原体はすべてLRである。9・10は口唇部にも施文されている。11と12は同一個体である。縄線文間に地文がみられ、口唇部にも縄文原体を用いたと思われる施文がみられる。13は指先(爪)による施文もなされている。

14・15は縄端圧痕文・短縄文が施されているものである。14の原体はLRで、口唇部には縄線文がある。15の原体はRLである。

16・17は組紐圧痕文が施されているものである。16は口唇部に撻紐による施文がみられる。

18～22は器面が縄文のみのものである。18は原体がRLで、比較的整然とした縄文である。口唇部も撻紐により施文されている。19はRL原体閉端部の回転と思われる痕跡が観察される。口唇部にも撻紐による施文がなされている。20は自縄自巻原体によるとと思われる羽状縄文がみられる。21はLRとRL原体による羽状縄文が施されている。22は羽状縄文の部分と横走気味の条がみられる部分とが交互に配されている。21と22は同一個体であるかもしれない。

23～39は平口縁のもので、口唇部直下の外面が張り出さないものである。

23～30は縄線文が施されているものである。23はLR原体による縄線文と縄端圧痕文が交互に配されている。24・25はLRとRL原体により並列する縄線文が施されている。25の地文はRL原体を用いている。26の施文原体はLRで、地文施文後に口唇部を調整したためか粘土が地文の上にかぶっている。27は縄線文が二本施されている。地文は自縄自巻原体によるとと思われる羽状縄文である。口唇部は棒状工具による刺突文がみられる。28の原体はLRである。内面の調整からI群に分類した。29はLR原体による縄線文が斜めに施されている。地文の原体も同じものである。30は細目のRL原体で、口唇部とその直下の器面に縄文原体の圧痕文が施されている。器面の圧痕施文には原体の閉端部を用いている。

31は口唇部直下の器面に短縄文が施されているものである。縄文は比較的整然と施されている。原体はともにLRである。

32・33は組紐圧痕文が施されているものである。組紐圧痕文が二本並列して施されている部分と、縄文が施されている部分が交互に配されている。縄文は別原体による羽状縄文と、LR原体による斜行縄文がある。33の組紐圧痕文は浅く施されている。

34・35は絡条体圧痕文が施されているものである。胎土などの特徴から同一個体と思われる。34の施文原体は幅7～8mmの角棒に細い1段Lの撻紐を軸に直交するように巻きつけたものと観察される。35は摩耗している。

36～39は器面の施文が縄文のみのものである。36は結束第一種の原体による羽状縄文が施されている。口唇部にも施文がみられる。内面の調整からI群に分類した。37は条の傾きを違えてある。外面一方向からあげられた補修孔がある。38は右上がりの条間に筋が観察される。原体はLR自縄自巻であると考えられる。39は条の傾きが様々である。

40～42は突起部分の破片である。

40はLR原体による縄線文と短縄文が施されている。短縄文は突起部にもみられる。41はRL原体を用いた縄端圧痕文がある。口唇部は縄線文が施されている。42はLR原体による縄線文が施されているものである。偏平であるので、土製品（楕円形を呈する？）であるかもしれない。

43～62は胴部の破片である。

43～45は貼付がなされているものである。43は器面に短縄文と縄文を施した後、貼付がなされている。貼付部分上は棒状工具による刻みがみられる。44は器面に短縄文と縄文が施された後、貼付がなされている。貼付部分には剥落がみられるが、その上は刻みが施されていると思われる。破片右下に結束第一種原体の回転痕跡がみられ、羽状縄文であると判断される。45は組紐原体による圧痕文があり貼付がなされている。貼付部分上は刻みである。

46・47は縄線文が施されているものである。46は縄端圧痕文もRL原体によるものである。47はLR原体による縄線文のほか、1段RとLを間隔を開けずに並列させて巻きつけた絡条体を回転施文したと思われる文様もみられる。

48～50は縄端圧痕文・短縄文が施されているものである。48は組紐圧痕文もみられる。49は組紐圧痕文とLR原体による縄文もある。50は短縄文の上下に縄文が施されている。

51～55は絡条体圧痕文が施されているものである。51の原体は単軸絡条体第2類であろうか。52の原体は幅5mmの角棒状の軸に1段Lと0段rを2本そろえて右方向に巻きつけたものである。53にはLR原体による縄文も施されている。52と53は同一個体であるかもしれない。54は幅7～8mmの角棒状の軸に1段Lを巻きつけた絡条体で施文している。55は菱形を構成する羽状縄文もみられる。これは、0段多条LRとRL原体による施文である。絡条体の軸は丸棒状かと思われる。

56は棒状工具による施文と思われるものである。幅2mm位の丸棒状工具を用いて、連続する刺突文が施されている。

57は指先（爪）による施文がなされているものである。横走する条がみられる。

58～62は器面が縄文のみのものである。58はLR斜行縄文と横走する条の部分が交互に配されている。59はRL原体と0段多条のLR原体による羽状縄文が施されている。60の原体は1段Rと思われる。61の原体は1段LとRを右撻りにした直前段合撻りである。1段Rが撻り戻しになっている。

62は組紐の回転圧痕文と思われるものにRL縄文原体を重ねて施文している。

土製円盤 [図V-1-4-69・70]

69・70は土器を円盤状にして製作された土製円盤である。69は縄端圧痕文と縄文が、70は縄文のみ施されている部分である。重量はともに21.8gである。時期は文様からI群B類に分類されよう。

II群土器 [図V-1-4-63～65]

63～65は同一個体と考えられる。63は口縁部の破片である。口縁部にはLR原体により縄線文が施されている。口唇部にも撻紐による施文がみられる。内面の調整は横方向のミガキである。64・65は胴部の破片である。多軸絡条体を縦方向に回転施文している。63～65はII群B類の円筒土器下層部に相当しよう。

押型文が施されている土器 [図V-1-4-66～68]



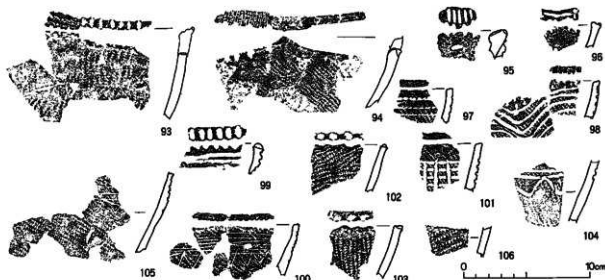
図V-1-5 包含層出土の土器(3)

66～68は同一個体で、押型文が施された土器である。菱目文と称される文様である。菱形がくずれている部分がみられるが、これは施文時に生じたものと考えられる。胎土は繊維を含む。時期については、VI章で考えることとする。

#### Ⅲ群土器 [図V-1-5-71～92]

71～82は波状口縁のもので、71～78は突起部の破片である。

71～77は貼付がなされているものである。71は地文が結束第一種の羽状縄文で、地文施文後に貼付がなされている。貼付は口唇部直下の器面を横断するものと、突起部下に「U」状を呈するものがある。貼付部分上の施文は前者は刻みのようなもので、後者は縄文原体による刻みである。72の地文の



図V-1-6 包含層出土の土器(4)

原体は結束第一種の羽状縄文で、条が切り合っている部分がみられる。貼付は突起部を形成している。口唇部直下の器面を横環する貼付部分が剥落したと考えられる痕跡もみられ、その部分には地文が観察される。突起部の貼付部分上は縄線文と盤紐による刻みが施されている。73は突起部が比較的厚く肥厚するものである。突起部上には縄線文がみられる。口唇部直下の器面には粘土紐が貼付られ、この上と口唇部には細い紐を密に巻いた絡条体による刻みが施されている。74は突起部を形成する貼付がみられ、その下の器面には比較的厚く粘土紐が貼付られている。突起部分には細い絡条体による圧痕文がみられる。器面の貼付部分には剝離している部分もみられるが、絡条体を「U」字状に折った圧痕文が観察される。75は突起部が貼付により肥厚するものである。粘土紐を「 $\cap$ 」状に貼付している。貼付部分上は半載竹管状と思われる工具による刺突文が施されている。76は貼付が突起部と口唇部になされているものである。貼付部分には丸棒状の工具による沈線文が施されている。地文は羽状縄文である。77は粘土紐の貼付により文様が構成されているものである。二本組の沈線文も施されている。78は突起部が細い棒状で、口唇部が肥厚するものである。結束第二種の羽状縄文が施されている。

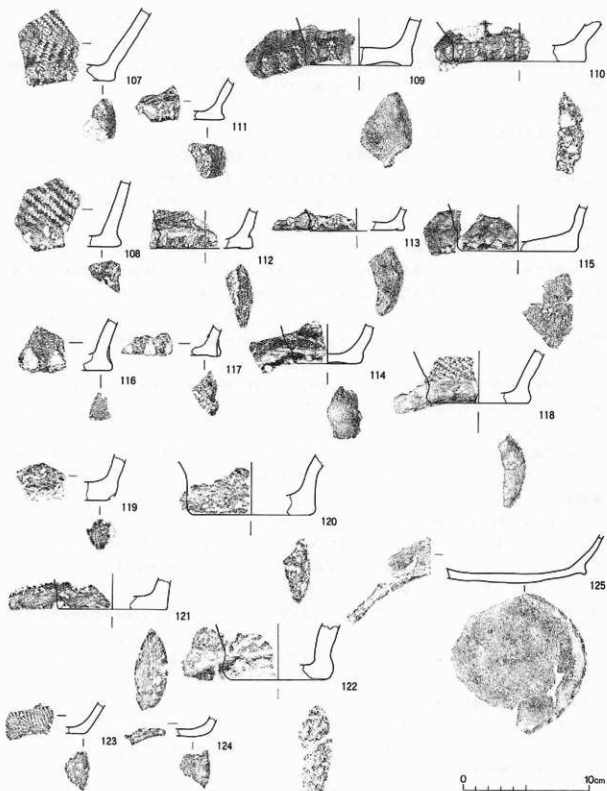
79~84は波状口縁であるが、突起部分でないものである。

79は突起部に近い部分である。口唇部直下の器面には粘土紐が二本貼付られ、突起部下にあたると考えられる器面には粘土塊の貼付がみられる。この上には刺突文が施されている。破片の右上端には半載竹管状工具による施文がみられる。

80は口唇部に刺突文が施されている。地文はともにLRを用いた結束第二種による斜行縄文である。81は口唇部直下とその下の器面に貼付帯がみられ、細い絡条体による刻みが施されている。82は口唇部が貼付により厚みをもつものである。この貼付部分上と口唇部には縄文原体による刻みが施されている。83は口唇部が貼付により肥厚する。この上には絡条体による刻みが施されている。また、器面と貼付部分の境目を同じ絡条体により押圧した痕跡もみられる。地文は複節の縄文のようである。84は貼付により口唇部が厚みをもつ。この上には半載竹管状工具による円形の刺突文がみられる。

86~92は平口縁と判断されるものである。

86は口縁部が貼付により肥厚するものである。この上にはLR原体を用いた縄線文が施されている。87は口唇部直下に貼付られた粘土紐上に細い絡条体による刻みがみられる。その下の器面には絡



図V-1-7 包含層出土の土器(5)

条体を横方向に連続して押圧した痕跡が観察される。88は口縁部に粘土紐が二本貼付けられ、縦方向の沈線文に切られている。貼付と器面との境目は指先(爪)により両側からつまみあげられている。89の地文は羽状縄文である。これを施した後、口唇部直下の器面に粘土紐を波状に貼付ている。この貼付部分上と口唇部にも縄文が施されている。90は地文が判然としない。口唇部から器面にかけて縄

文原体による刻みが施されている。91と92の口縁部にはナデ調整により生じたと考えられる凹んだ部分が横環してみられる。91は地文が判然としない。口唇部から器面にかけては撚紐と思われる原体による刻みが施されている。92はLR原体による地文がナデ調整により消されている部分がある。口唇部には半截竹管状と思われる工具による円形の刺突文がみられる。

#### V群土器

93～96は突起部の破片である。

93は地文がLR原体による縦走気味の縄文である。口唇部は縄文原体による刻みが施され、突起部には縄線文もみられる。94はRL原体による縄文が施されている。突起部から左の口唇部には撚紐による施文がなされた後、棒状工具による刻みが施されている。95と96は棒状工具により施文がなされている。

97～103は口縁部の破片である。

97はRL原体による斜行縄文を施した後、1段Rの縄線文を施している。98は曲線的な沈線文が複数みられ、円形の刺突文が施されている。口唇部には撚紐による施文がみられる。99は器面に沈線文、口唇部には棒状工具による刻みが施されている。100は口唇部直下の器面に平行する沈線文を複数施し、その下には鋸歯状の沈線文が施されている。口唇部から外面にかけての部分には刻みがなされている。

101は複数の平行する沈線文がみられ、縦方向のものが横方向のものを切っている。102・103は口唇部に棒状工具による施文がみられる。

104～106は胴部の破片である。

104の沈線文は平行するものと鋸歯状のものである。105は100と同一個体である。106は胎土に黒曜石のフレイクチップがみられる。意識的に混入したものではないであろう。

#### 底部破片

107～117はI群b類の底部である。

107～114は縄端圧痕文・短縄文が底部外面に施されているものである。107は別原体による羽状縄文が施されている。108は比較的底部の外面が張り出すものである。109は縦走気味の縄文がみられる。110の器形は比較的広がって胴部へとつながるようである。111の器形は底部外面が張り出し、胴部へと開くようである。112は胴部にLR原体による縄線文が施されている。114は比較的摩耗している。

115は底部外面に棒状工具による横方向からの刺突文が施されているもので、116・117は底部外面に指頭による圧痕文が施されている。

118～122はIII群の底部である。

118は底部近くの外面にナデ調整が施されている。119は稜路文らしき痕跡がみられる。120は底部外面があまり張り出さない。121は繊維の混入が多くみられる。122は底面の外側が剥落している。

123～125はV群の底部である。

いずれも胴部へは広くつながるようで、浅鉢の底部と考えられる。123はRL原体による縦走気味の縄文がみられる。125は高台状の貼付がみられる。

表V-1-1 包含層出土 復元掲載土器観察表

図	掲載番号	出土地点	遺物番号	層位	部位	接合破片数	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調		内面調整	施文具	胎土	織維の有無	使用の痕跡	接合・同一個体	備考(時期分類)
										外面	内面							
V-1-3	1	J-52	2	IV	口縁部 ~胴部	13	(0.8)	(0.1)	—	橙	橙	ナデ 指頭 圧痕	結条体	中	なし	内外面部分的に 黒色化	J-54-2・V(1) J-54-4・V(1) と接合 図V-1-3-2 と同一個体	I群
#	2	J-52	2	IV	胴部 ~底部	9	(6.8)	—	丸底	橙	橙	ナデ 指頭 圧痕	結条体	中	なし	内外面部分的に 黒色化	J-54-4・V(1) と接合 図V-1-3-1 と同一個体	I群
#	3	J-52	2	IV	胴部 ~底部	21	(9.1)	—	丸底	黒褐 黄橙	黒褐 褐灰	ナデ 指頭 圧痕	縄文 原体	中	なし	内面全体的に 黒色化・炭化 物付着	J-51-2・IV(1) J-53-3・IVb(3) J-54-4・V(1) と接合	I群
#	4	L-47	2	IVa	胴部 ~底部	10	(0.0)	—	0.0	橙	褐灰 黒褐	ナデ	縄文 原体	中	あり (中量)	胴部内面に 微量	—	III群
#	5	J-64	4	V	胴部 ~底部	4	(3.3)	—	(9.2)	黄橙	黄橙	ナデ	縄文 原体	粗	あり (少量)	—	J-63-4・V(2) と接合	I群

表V-1-2 包含層出土 破片掲載土器観察表(その1)

図	掲載番号	出土地点	遺物番号	層位	破片部位	接合破片数	色調		内面調整	施文具	胎土	織維の有無	使用の痕跡	接合・同一個体	備考(時期分類)
							外面	内面							
V-1-3	6	J-65	1	V	口縁部	—	橙	黄橙	ナデ	縄文原体	粗	あり(少量)	—	I群a類	
#	7	K-59	8	V	胴部	—	黄橙	黄橙	ナデ	縄文原体	粗	なし	—	I群a類	
#	8	L-59	8	V	口縁部	—	橙	黄橙	ナデ	縄文原体	粗	なし	内面黒色化	I群b類	
#	9	K-59	8	V	口縁部	—	黄橙	黄橙	ナデ	縄文原体	粗	あり(少量)	—	I群b類	
#	10	K-59	5	IV	口縁部	—	黄橙	黄橙	ナデ	縄文原体	粗	あり(中量)	—	I群b類	
#	11	K-59	8	V	口縁部	—	黄橙	黄橙	ナデ	縄文原体	中	あり(微量)	内外面一部 黒色化	I群b類	
#	12	L-59	8	V	口縁部	—	黄橙	黄橙	ナデ	縄文原体	中	なし	—	I群b類	
#	13	J-68	2	V	口縁部	4	橙	黄橙	ナデ	縄文原体	粗	あり(少量)	—	I群b類	
#	14	K-61	3	V	口縁部	—	黄橙	黄橙	ナデ	縄文原体	粗	あり(少量)	—	I群b類	
#	15	J-67	3	V	口縁部	—	黄橙	黄橙	ナデ	縄文原体	粗	あり(少量)	—	I群b類	
#	16	J-57	11	V	口縁部	4	橙	黄橙	ナデ	縄文原体	粗	あり(少量)	—	I群b類	
#	17	L-60	7	V	口縁部	2	黄橙	黄橙	ナデ	縄文原体	粗	あり(中量)	—	I群b類	
#	18	K-63	4	V	口縁部	2	黄橙	黄橙	ナデ	縄文原体	中	あり(少量)	—	I群b類	
#	19	J-68	4	VI	口縁部	—	橙	黄橙	ナデ	縄文原体	粗	あり(少量)	—	I群b類	
#	20	K-58	11	V	口縁部	—	黄橙	黄橙	ナデ	縄文原体	中	なし	—	I群b類	
#	21	K-58	1	I	口縁部	—	黄橙	黄橙	ナデ	縄文原体	中	あり(少量)	—	I群b類	
#	22	K-59	8	V	口縁部	4	黄橙	黄橙	ナデ	縄文原体	粗	あり(中量)	—	I群b類	
#	23	K-66	11	VI	口縁部	—	橙	黄橙	ナデ	縄文原体	粗	あり(少量)	—	I群b類	
#	24	J-57	11	V	口縁部	2	黄橙	黄橙	ナデ	縄文原体	中	あり(少量)	—	I群b類	
#	25	J-60	1	IV	口縁部	—	明赤褐	明赤褐	ナデ	縄文原体	中	あり(少量)	—	I群b類	
#	26	J-65	5	V	口縁部	—	黄橙	黄橙	ナデ	縄文原体	中	あり(少量)	内外面黒色化	I群b類	
#	27	J-57	11	V	口縁部	—	褐灰	黄橙	ナデ	縄文原体	中	なし	—	I群b類	
#	28	J-58	11	V	口縁部	—	黒褐	黄橙	ナデ	縄文原体	中	あり(少量)	内外面黒色化	I群b類	
#	29	K-60	10	V	口縁部	—	黄橙	黄橙	ナデ	縄文原体	粗	あり(少量)	内面部分的に 黒色化	I群b類	
#	30	J-61	1	V	口縁部	—	橙	黄橙	ナデ	縄文原体	粗	あり(少量)	—	I群b類	



表V-1-2 包含層出土 破片掲載土器観察表(その2)

図	掲載番号	出土地点	遺物番号	層位	破片部位	接合面	色	裏面	内面調整	施文具	胎土	繊維の有無	使用の痕跡	接合・同一個体	備考(図版分類)	
V-1-3	31	K-65	3	I	口縁部	2	浅黄褐色	に濃い黄褐色	ナデ	縄文原形	粗	あり(微量)	—	—	I群b類	
#	32	不明	不明	不明	口縁部	5	黒褐色	明黄褐色	ナデ	縄文原形	粗	あり(少量)	灰化物付着 外面に多量	—	I群b類	
#	33	K-60	10	V	口縁部	3	明黄褐色	に濃い黄褐色	ナデ	粗細原形	粗	あり(微量)	—	K-40-5-V22と接合	I群b類	
#	34	K-58	11	V	口縁部	—	黒褐色	褐灰	ナデ	絡条体	粗	あり(少量)	外面黒色化	同一個体 図V-1-54と 同一個体?	I群b類	
#	35	K-63	4	V	口縁部	2	浅黄褐色	橙	ナデ	絡条体	中	あり(微量)	—	—	I群b類	
V-1-4	36	J-54	2	IVb	口縁部	5	橙	ナデ	縄文原形	粗	なし	—	—	—	I群b類	
#	37	J-54	2	IVb	口縁部	2	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	ナデ	縄文原形	粗	あり(中量)	—	—	—	I群b類
#	38	K-46	3	IV	口縁部	—	黒褐色	黒褐色	ナデ	縄文原形	中	なし	—	—	—	I群b類
#	39	K-58	11	V	口縁部	—	黒褐色	に濃い黄褐色	ナデ	縄文原形	中	あり(中量)	—	—	—	I群b類
#	40	K-69	4	V	口縁部	—	浅黄褐色	に濃い黄褐色	ナデ	縄文原形	粗	あり(少量)	—	—	—	I群b類
#	41	J-68	4	VI	口縁部	—	浅黄褐色	に濃い黄褐色	ナデ	縄文原形	粗	あり(少量)	—	—	—	I群b類
#	42	L-64	2	V	口縁部	—	黄褐色	明黄褐色	ナデ	縄文原形	粗	なし	—	—	—	I群b類
#	43	K-50	4	VI	胴部	—	橙	に濃い黄褐色	ナデ	縄文原形	粗	なし	—	—	—	I群b類
#	44	J-57	11	V	胴部	—	赤褐色	黒褐色	ナデ	縄文原形	粗	なし	灰化物付着 内面に多量	—	—	I群b類
#	45	K-58	11	V	胴部	—	橙	黒褐色	ナデ	粗細原形	粗	なし	灰化物付着 内面に多量	IV-1-3-8と同一個体	I群b類	
#	46	J-62	3	V	胴部	4	橙	ナデ	縄文原形	粗	あり(中量)	—	J-62-3-V22 K-58-7-V10と接合	—	I群b類	
#	47	K-60	1	V	胴部	—	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	ナデ	絡条体	粗	なし	—	—	—	I群b類
#	48	J-60	7	V	胴部	—	橙	黄褐色	ナデ	縄文原形	粗	あり(多量)	—	—	—	I群b類
#	49	K-57	1	IVa	胴部	—	橙	黒褐色	ナデ	縄文原形	粗	あり(少量)	灰化物付着 内面に多量	—	—	I群b類
#	50	J-57	7	V	胴部	—	橙	明黄褐色	ナデ	縄文原形	粗	あり(中量)	—	—	—	I群b類
#	51	L-53	4	IV	胴部	—	橙	黒褐色	ナデ	絡条体	粗	なし	灰化物付着 内面に少量	—	—	I群b類
#	52	J-61	1	V	胴部	—	橙	に濃い黄褐色	ナデ	絡条体	粗	あり(多量)	—	—	—	I群b類
#	53	K-60	10	V	胴部	—	橙	に濃い黄褐色	ナデ	縄文原形	粗	あり(多量)	内面部分的に 黒色化	同一個体?	—	I群b類
#	54	K-58	11	V	胴部	2	橙	に濃い黄褐色	ナデ	絡条体	粗	あり(中量)	外面部分的に 黒色化	IV-1-3-3&5&7と同一個体?	—	I群b類
#	55	K-47	1	IVb	胴部	4	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	縄文原形	粗	あり(少量)	内面部分的に 黒色化	—	—	I群b類
#	56	K-58	11	V	胴部	—	に濃い黄褐色	黒褐色	ナデ	縄文原形	粗	あり(多量)	内面部分的に 黒色化	—	—	I群b類
#	57	J-56	5	V	胴部	3	明赤褐色	赤褐色	ナデ	縄文原形	粗	あり(微量)	灰化物付着 内面に少量	—	—	I群b類
#	58	K-59	8	V	胴部	11	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	縄文原形	粗	あり(中量)	—	—	—	I群b類
#	59	K-50	4	VI	胴部	—	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	ナデ	縄文原形	粗	あり(中量)	—	—	—	I群b類
#	60	K-59	8	V	胴部	—	橙	褐灰	ナデ	縄文原形	粗	あり(中量)	—	—	—	I群b類
#	61	L-60	5	V	胴部	—	橙	明黄褐色	ナデ	縄文原形	粗	あり(少量)	—	—	—	I群b類?
#	62	K-53	11	IV	胴部	—	橙	褐灰	ナデ	縄文原形	粗	あり(多量)	外面部分的に 黒色化	—	—	I群b類?
#	63	K-58	11	V	口縁部	—	橙	黒褐色	ミガキ	縄文原形	密	あり(中量)	内面黒色化	—	—	II群
#	64	K-58	7	V	胴部	—	橙	ナデ	絡条体	中	あり(中量)	—	—	同一個体	—	II群
#	65	K-56	1	I	胴部	—	橙	明黄褐色	ナデ	絡条体	中	あり(中量)	—	—	—	II群
#	66	K-62	5	V	胴部	—	橙	に濃い黄褐色	ナデ?	押型文原形	粗	あり(中量)	—	—	—	III群
#	67	L-59	8	V	胴部	—	橙	に濃い黄褐色	ナデ?	押型文原形	粗	あり(中量)	—	—	—	III群
#	68	K-64	11	V	胴部	—	橙	に濃い黄褐色	ナデ?	押型文原形	粗	あり(中量)	—	—	—	III群
#	69	K-59	8	V	胴部	—	に濃い黄褐色	明黄褐色	ナデ	縄文原形	粗	なし	—	—	—	I群b類
#	70	K-62	9	VI	胴部	—	に濃い黄褐色	橙	ナデ	縄文原形	粗	なし	—	—	—	I群b類
V-1-5	71	K-52	1	IVa	口縁部	2	橙	に濃い黄褐色	ミガキ	縄文原形	粗	あり(多量)	内面黒色化	K-53-3・IVb11と接合	—	III群
#	72	L-53	4	IV	口縁部	2	浅黄褐色	明黄褐色	ナデ	縄文原形	粗	あり(多量)	—	K-62-4・VII1と接合	—	III群
#	73	L-46	3	IVb	口縁部	—	黒褐色	褐灰	ミガキ	縄文原形	粗	あり(多量)	—	—	—	III群
#	74	J-54	5	I	口縁部	—	明赤褐色	に濃い黄褐色	ミガキ	縄文原形	粗	あり(多量)	内面黒色化	—	—	III群
#	75	K-62	9	VI	口縁部	—	橙	ミガキ	ミガキ	半熟竹葉 状の 挿入物	粗	あり(多量)	—	—	—	III群
#	76	L-59	1	I	口縁部	—	明黄褐色	に濃い黄褐色	ナデ?	縄文原形	粗	あり(中量)	—	—	—	III群
#	77	K-48	2	IV	口縁部	4	浅黄褐色	橙	不明	不明	粗	あり(多量)	—	—	—	III群

表V-1-2 包含層出土 破片掲載土器観察表(その3)

図	掲載番号	出土地点	遺物番号	層位	破片部位	接合位置	色	内面	内面調整	施文具	胎土	線維の有無	使用の痕跡	接合・同一胴体	備考 時期分類
V-1-5	78	K-59	8	V	口縁部(突起部)	2	褐色～黄褐色	褐色	ナデ?	縄文原体	粗	あり(多量)	—	—	Ⅲ群
	#	79	J-54	1	IVa	—	赤～橙	赤褐色	ナデ?	縄文原体	粗	あり(多量)	—	—	Ⅲ群
	#	80	K-65	6	V	口縁部	2	橙	橙	ナデ	縄文原体	粗	あり(多量)	—	Ⅲ群
	#	81	K-64	2	IV	口縁部	2	橙	橙	ナデ?	縄文原体	粗	あり(少量)	—	Ⅲ群
	#	82	J-56	5	V	口縁部	—	橙	橙	ナデ?	縄文原体	粗	あり(多量)	—	Ⅲ群
	#	83	K-53	3	IVb	口縁部	—	褐色～黄褐色	赤	ナデ	縄文原体	粗	あり(中量)	—	Ⅲ群
	#	84	J-56	5	V	口縁部	—	黄褐色	黄褐色	ミガキ	縄文原体	密	あり(多量)	—	Ⅲ群
	#	85	K-53	7	攪乱	口縁部	—	橙	暗褐色	ミガキ	縄文原体	粗	あり(少量)	—	Ⅲ群
	#	86	L-58	1	II	口縁部	—	黄褐色	黄褐色	ミガキ	縄文原体	粗	あり(多量)	—	Ⅲ群
	#	87	J-59	3	V	口縁部	—	橙	橙	ミガキ	縄文原体	粗	あり(多量)	—	Ⅲ群
	#	88	L-59	5	IV	口縁部	—	褐色	橙	ミガキ	縄文原体	粗	あり(中量)	—	Ⅲ群
	#	89	L-54	12	V	口縁部	—	橙	橙	ミガキ	縄文原体	粗	あり(多量)	—	Ⅲ群
	#	90	K-53	3	IVb	口縁部	6	黄褐色	黄褐色	ミガキ	縄文原体	密	あり(多量)	—	Ⅲ群
	#	91	K-61	3	V	口縁部	4	褐色	褐色	ナデ	?	中	あり(多量)	—	Ⅲ群
	#	92	K-56	3	IV	口縁部	3	黄褐色	明黄褐色	ナデ	?	粗	あり(多量)	—	Ⅲ群
V-1-6	93	K-60	7	IV	口縁部(突起部)	5	褐色	褐色	ナデ	縄文原体	粗	あり(多量)	—	Ⅲ群	
	#	94	L-60	3	IV	口縁部(突起部)	5	黄褐色	明黄褐色	ナデ	縄文原体	中	なし	—	V群
	#	95	K-60	5	VI	突起部	—	黄褐色	黄褐色	ナデ	棒状工具	中	なし	—	V群
	#	96	K-60	1	V	突起部	—	黄褐色	褐色	ナデ	棒状工具	中	なし	—	V群
	#	97	L-60	3	IV	口縁部	—	灰色	褐色	ナデ	縄文原体	粗	あり(少量)	—	V群
	#	98	J-67	3	V	口縁部	2	明黄褐色	黄褐色	ナデ	縄文原体	中	なし	—	V群
	#	99	J-58	1	IV	口縁部	—	黄褐色	灰黄褐色	ナデ	縄文原体	粗	なし	—	V群
	#	100	K-60	1	IV	口縁部	4	灰黄褐色	黄褐色	ナデ	縄文原体	中	なし	—	V群
	#	101	J-66	5	V	口縁部	—	黄褐色	黒褐色	ナデ	縄文原体	中	なし	—	V群
	#	102	K-61	3	V	口縁部	—	黄褐色	褐色	ナデ	縄文原体	中	なし	—	V群
	#	103	J-60	4	I	口縁部	—	褐色	黄褐色	ナデ	縄文原体	中	なし	—	V群
	#	104	K-62	3	IV	胴部上半	—	黄褐色	黄褐色	ナデ	縄文原体	中	あり(少量)	—	V群
	#	105	K-60	7	IV	胴部上半	7	黄褐色	褐色	ナデ	縄文原体	中	なし	—	V群
	#	106	L-59	8	V	胴部	—	橙	黒褐色	ナデ	縄文原体	中	なし	—	V群
	V-1-7	107	K-63	4	V	底部	—	橙	褐色	ナデ	縄文原体	粗	あり(多量)	—	Ⅰ群
#		108	K-58	7	V	底部	—	橙	褐色	ナデ?	縄文原体	粗	あり(中量)	—	Ⅰ群
#		109	L-56	1	I	底部	—	橙	黄褐色	ナデ?	縄文原体	中	あり(多量)	—	Ⅰ群
#		110	J-66	5	V	底部	—	橙	黄褐色	ナデ?	縄文原体	粗	あり(多量)	—	Ⅰ群
#		111	K-65	6	V	底部	—	橙	褐色	ナデ	縄文原体	粗	あり(多量)	—	Ⅰ群
#		112	L-59	1	I	底部	—	暗赤褐色	黄褐色	ナデ	縄文原体	中	あり(多量)	—	Ⅰ群
#		113	K-59	8	V	底部	—	褐色	黄褐色	ナデ	縄文原体	中	あり(中量)	—	Ⅰ群
#		114	L-53	4	IV	底部	—	黄褐色	黄褐色	ナデ	縄文原体	中	あり(中量)	—	Ⅰ群
#		115	L-58	5	V	底部	2	黄褐色	褐色	ナデ	棒状工具	中	あり(中量)	—	Ⅰ群
#		116	J-65	13	木根	底部	—	橙	黒褐色	?	指先	粗	あり(少量)	—	Ⅰ群
#		117	K-60	10	V	底部	—	黄褐色	黄褐色	ナデ?	縄文原体	中	あり(少量)	—	Ⅰ群
#		118	J-54	1	IVa	底部	—	橙	黄褐色	ナデ	縄文原体	密	あり(多量)	—	Ⅲ群
#		119	K-59	5	IV	底部	—	黄褐色	黄褐色	?	?	粗	あり(多量)	—	Ⅲ群
#		120	L-47	2	IVa	底部	—	明赤褐色	黄褐色	ナデ	?	中	あり(多量)	—	Ⅲ群
#		121	J-62	3	V	底部	—	黄褐色	褐色	?	?	密	あり(多量)	—	Ⅲ群
#	122	J-59	3	V	底部	2	黄褐色	黒褐色	ナデ?	?	粗	あり(多量)	—	Ⅲ群	
#	123	L-54	1	I	底部	—	黄褐色	橙	ナデ	縄文原体	粗	なし	—	V群	
#	124	L-55	2	V	底部	—	赤褐色	黄褐色	ナデ	?	粗	なし	—	V群	
#	125	K-61	3	V	底部	5	黄褐色	黄褐色	ナデ	?	粗	あり(中量)	—	V群?	

## 2. 包含層出土の石器 [図V-2-2 図版16表V-2]

本調査において検出された石器は、83点である。このうち、定型的なもの21点を図示した。

石器は、調査区のほぼ全域から出土しているが、とくに、62ラインから調査区南側境界にかけての平坦部と52～60ライン間の北へ傾斜する比較的緩やかな斜面部に多く、出土遺物の70%を占めている。60～70ライン間の平坦部は耕作によると思われる削平を、一般国道36号と接する部分では改修工事による攪乱を受けている [図IV-1-1]。

石器は、石鏃、石槍またはナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、すり石、砥石などが出土している。石器等の総点数は1,394点で、このうち剥片・砕片が約91.6%を占めている。出土した剥片石器は41点で、石鏃が36.6%と最も出土割合が高く、つまみ付きナイフが17.0%、ついで石槍またはナイフが14.6%と多い。礫石器は、42点出土した。石斧が88.1%と出土割合が非常に高いが、すべて破片で、器形の推定可能な資料はごくわずかである。このほかに、砥石、すり石が出土している。

剥片石器の石材は、黒曜石・頁岩・メノウ質頁岩がみられる。石鏃・石槍・ナイフは黒曜石、つまみ付きナイフ・スクレイパーは頁岩・メノウ質頁岩の使用割合が多い。黒曜石は、肉眼観察から十勝三叉、白滝、余市赤井川などの原産地を推定させるものがみられる。また、ごくわずかではあるが豊浦町豊泉産のものと思われる黒曜石の剥片・砕片が確認された。

本文中で頁岩と記載しているものは、灰白色・緑色・褐色・黒褐色などの色調を呈するが、すべて珪質頁岩に属するものである。

礫石器の石材は、緑色泥岩、片岩、蛇紋岩、安山岩、砂岩がみられる。

### 石鏃 (I群A類) [図V-2-2-1～11 図版16-1]

15点が出土している。このうち、11点を図示した。剥片石器の中で、最も出現率が高く約36.6%を占める。1～8は一般的な無茎鏃である。1～4は薄身で柳葉形のもの (IA3a) である。1・3・4は先頭部を、2は先頭部と基部を欠損する。5・6は三角形で凹基のもの (IA4a) である。5は表面に、6は表・裏面に一次剥離面を残す。5は先頭部を欠損する。7・8は木の葉形 (IA5) を呈するものである。7は表面に一次剥離面を残す。8は先頭部を欠損する。9～11は一般的な有茎鏃 (IA6) である。9は表面に、10は裏面に一次剥離面を残す。11は基部を欠損する。石質は、すべて黒曜石である。

### 石錐 (II群A類) [図V-2-2-12 図版16-2]

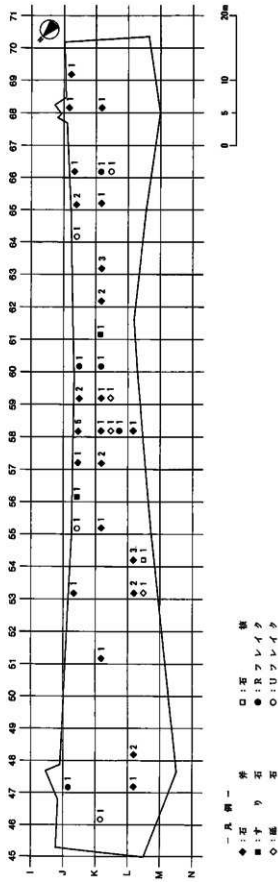
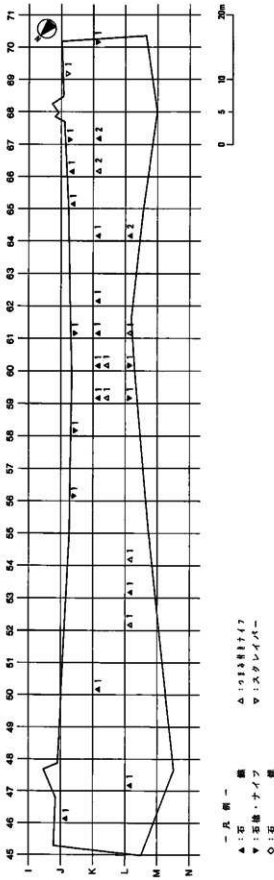
1点のみの出土である。これを図示した。刺突部が作り出されたもの (IIA1) である。両面加工で、長軸方向の両端に刺突部が作出されていたものと思われる。下端部には使用によると思われる刺突部のつぶれがみられ、上端部は使用により欠損している。裏面に一次剥離面を残す。石質は、頁岩である。

### つまみ付きナイフ (III群A類) [図V-2-2-13 図版16-2]

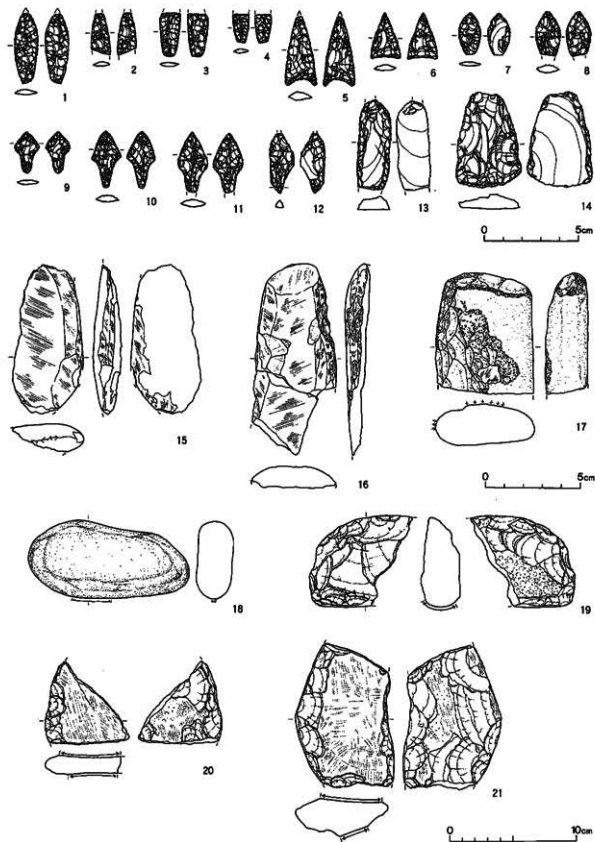
7点が出土している。このうち1点を図示した。剥片石器の中で、石鏃について出土割合が高く17.0%を占める。片面全面加工のものであるが、IIIA1のように裏面に刃部をもたないもの (IIIA2) である。つまみ部と下端部を欠損する。石質は、メノウ質頁岩である。

### スクレイパー (III群B類) [図V-2-2-14 図版16-2]

1点のみの出土である。これを図示した。一般に石べらと称されるもの (IIIB1) である。刃部が曲線的になるものである。石質は、頁岩である。



図V-2-1 包含層出土石器の産別分布



図V-2-2 包含層出土の石器

## 石斧 (IV群A類) [図V-2-2-15~17 図版16-3]

37点が出土している。このうち3点を図示した。礫石器の中では、最も出現率が高く88.1%を占めるが、大部分が器表面の剥落した小破片などである。このため、比較的器形の推定が可能なものを図示した。15は擦り切り手法によって製作されたもの (IVA 1) である。右側縁に不明瞭ながら擦り切り痕が認められる。左側縁から背面にかけて刃部を欠損する。16は全面磨製のもの (IVA 3) である。背面全面と腹面の胴部から刃部にかけてを欠損する。17は胴部から基部にかけての破片である。左側縁と長軸方向の上端に器面調整のためと思われる粗い打ち欠きが施されている。さらに、この打ち欠き痕の周囲に敲打による調整痕がみられる。器表面には研磨跡はみられない。このことから、石斧製作途中での欠損破片で、打ち欠き・敲打による調整がみられるタイプの磨製石斧 (IVA 3) と考えられる。石質は、15が緑色泥岩、16が片岩、17が蛇紋岩である。

## すり石 (VI群A類) [図V-2-2-18・19 図版16-3]

2点が出土している。これを図示した。18は扁平礫を素材としたもの (VIA 2) である。扁平礫の一侧縁にすり面がみられる。19は扁平礫を半円状に打ち欠き、その弦をすったもの (VIA 3) である。石質は、いずれも安山岩である。

## 砥石 (VII群B類) [図V-2-2-20・21 図版16-3]

3点が出土している。この2点を図示した。いずれも板状の砥石 (VII B 2) の破片である。20・21ともに、器形の調整のためと思われる打ち欠きが施されている。また、いずれの破片にも表面に狭い範囲ではあるが研磨面がみられ、表面は使用により研磨面が皿状に凹んでいる。石質は、いずれも砂岩である。

表V-2 包含層出土掲載石器一覽

番号	名称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×厚さcm×重さg)	石質	備考
1	石 鏃	IA 2 a	J-46・2	IV	(3.6) × 1.3 × 0.3 · 1.3	黒 曜 石	
2	"	"	K-67・4	V	(2.2) × (1.0) × 0.3 · 0.4	"	
3	"	"	K-64・5	"	(2.2) × (1.1) × 0.2 · 0.6	"	
4	"	"	K-62・12	VI	(1.4) × (0.9) × 0.2 · 0.3	"	
5	"	IA 3 a	L-47・3	IV a	(3.6) × 1.6 × 0.4 · 1.9	"	
6	"	IA 3 b	K-50・2	IV	2.3 × 1.5 × 0.3 · 0.7	"	
7	"	IA 4	K-59・3	II	2.1 × 1.2 × 0.2 · 0.5	"	
8	"	"	L-60・4	IV	(2.3) × 1.3 × 0.4 · 1.0	"	
9	"	IA 6	K-61・6	VI	2.1 × 1.3 × 0.3 × 0.5	"	
10	"	"	L-53・2	I	2.9 × 1.5 × 0.4 · 1.0	"	
11	"	"	K-67・2	"	(3.1) × 1.5 × 0.5 · 1.6	"	
12	石 錐	II A 1	地点不明・7		(3.2) × 1.4 × 0.9 · 3.1	頁 岩	
13	つみ付きナイフ	III A 2	L-52・5	V	(4.7) × 1.8 × 0.9 · 8.7	メノウ質頁岩	
14	スクレイパー	III B 1	J-69・4	VI	5.0 × 3.5 × 0.8 · 14.7	頁 岩	
15	石 斧	IVA 1	J-68・5	"	(7.8) × 3.7 × (1.5) · 44.9	緑色泥岩	
16	"	IVA 3	L-53・5	IV	(10.1) × 4.4 × (1.3) · 127.1	片 岩	接合資料
17	"	"	K-55・5	VI	(6.4) × 5.2 × 2.3 · 60.3	蛇 紋 岩	
18	すり石	VIA 2	J-56・3	IV	5.2 × 12.8 × 2.9 · 411.8	安 山 岩	
19	"	VIA 3	K-61・2	II	7.1 × (8.3) × 3.4 · 235.4	"	
20	砥 石	VII B 2	K-59・6	IV	(6.5) × (6.6) × 1.6 · 67.6	砂 岩	
21	"	"	K-58・8	"	(12.0) × 8.5 × 3.1 · 253.4	"	

## VI. ま と め

本調査において、土壇3基、Tピット3基、焼土2ヵ所、フレイク・チップ集中1ヵ所の遺構が確認された。また、遺物は土器4,550点、石器・石器等4,610点が出土した。

以下では、Tピット、土器、石器等の分布、時期等について記し、まとめとする。

### 1. Tピットについて

今回の発掘調査では、一般に狩猟用の陥し穴と考えられているTピットが3基（TP-1～3）検出された。

#### 〔規模・形態〕

壇底面が最長のものはTP-1の3.48mである。両端には、崩壊によると考えられる広がりがありそれぞれ10cm程あるが、それでも他の2基より長い。3基の平均は2.95mである。

壇底面の幅はTP-3が22cmと最も広い。平均は19cmである。

確認面からの深さは、TP-1が1.44mと最も深く、隣接するTP-2とは31cmの差がある。平均は1.31mである。

なお、3基とも杭のような跡はみられなかった。

これらのTピットを各氏の形態分類に当てはめると、森田・遠藤の長幅比分類（森田・遠藤 1984）ではA<sub>1</sub>型・B<sub>1</sub>型に、佐藤孝則の短軸長分類（佐藤 1986）では、B<sub>1</sub>型・C<sub>1</sub>型に、内山の壇底部平面形を重視した分類（内山 1977）によればA型に相当する。今回検出された3基のTピットは、壇底面が細長い溝状を呈し、杭のような跡などをもたないものであると言えよう。

#### 〔立地・配列〕

TP-1・2は台地縁辺部の緩斜面上に立地する。確認面の標高は約46mである。長軸は谷に対して直交すると平行するともとれる。TP-3は台地の平坦部に立地しているようにみえるが、台地そのものが削平されている可能性が高い。確認面の標高は約50mである。長軸方向は3基とも北西一南東を示す。

今回検出されたTピットはわずか3基であり、配列の有無についてははっきりしない。TP-1・2とTP-3に関しては、立地が異なる100m程の距離があることから、おそらく相互の配列関係はないと思われる。

#### 〔問題点〕

1) TP-1とTP-2に構築時間の差があったかどうか。両者は確認面でわずか10cmしか離れておらず、ほとんど同じ長軸方向（N-62°-W N-55°-W）を示し、切り合いはみられない。異なるところは、規模においてTP-2がTP-1より一回り小さいことぐらいである。

Tピットが隣接する理由としては、その場所がエゾシカなどの捕獲場所として重要であったことが前提として考えられる。そこから派生して、崩壊・埋没などによって機能を失ったTピットの代わり、時期や配列の異なるTピットなどではないかという考えが生じてくる。しかし、機能を失ったTピットの代わりなら、もとのTピットを掘り返してもよいであろうし、時期や配列の異なるものであれば、長軸方向がほとんど同じであること、形態に大きな違いはないことなどが気にかかる。このため、同時に構築したのもとも思われ、はっきりした結論は出せなかった。

2) TP-2の覆土上位に焼土が含まれている。このような例は、札幌市S269遺跡第1・2号ピットで注意され、その後、青森県上北郡六ヶ所村発茶沢遺跡でも同様な例が報告されている。発茶沢遺跡

では、このような焼土を廃棄したものと解釈している。

本遺構の焼土も二次的な堆積状況と考えられる。しかし、どのような経歴をもつ焼土であったかがはっきりせず、今後土壌試料の分析によってその性格を明らかにする必要がある。

## 2. 土器について

本遺跡からは4550点の土器が出土した。しかしほとんどが断片的で、層的な出土状況についても良好とは言えなかった。以下、各時期分類ごとに比較的特徴のあるものをとりあげる。

### 【I群土器】

条痕文が施されているものは二点（6・7）あり、内面にもみられる。

東銅路式系土器群は最も出土点数が多く、本遺跡の主体をなすものと思われる。口唇部直下の外面が張り出すなどの特徴をもつ東銅路Ⅲ式（8～22など）、絡条体圧痕文や比較的整然と施される縄文などが特徴とされるコックロ式（51～55など）、絡条体や自縄自巻原体による羽状縄文などが特徴的な東銅路Ⅳ式（1～3など）が出土している。中茶路式に相当するものはみられない。

底部の器形は大きく分けて、胴部へと比較的広がり気味につながるもの（107・110など）と、それよりも直立気味につながるもの（108・109・115など）があるようである。

### 【II群土器】

円筒土器下層式（63～65）の破片が三点出土している。外反する口縁部には縄線文、胴部には多軸絡条体の縦位回転による地文が施されている。以上の特徴から、円筒土器下層d 2式に相当するものと考えられる。現在のところ、円筒土器下層式の分布の北限は石狩低地帯付近とされている。

### 【III群土器】

波状口縁のものは、貼付部分上の施文に縄文原体・絡条体・爪などを用いているもの（71～74・81など）と、半截竹管状工具を用いているもの（75など）とがある。前者は萩ヶ岡1式、後者は萩ヶ岡2式に相当するものと考えられる。77は器面の文様構成などからサイベ沢Ⅶ式に比定されよう。

平口縁のものでは、口縁部にナデ調整がなされた横環する部分があるもの（91～92）が特徴的かと思われる。

III群土器の時期はおおよそ中期中頃と考えられる。

### 【V群土器】

V群土器の器種に関しては、漁鉢形土器（93・94・123～125など）が多いように思われる。100・104・105は、口縁部に平行する沈線文が複数みられ、その下位に鋸歯状の沈線文が施されているものである。これは、千歳市マチ遺跡II黒層出土遺物に類例（北海道埋蔵文化財センター 1987 図一Ⅲ-58の72）がある。マチ遺跡II黒層の土器は、大洞C 2～A式に併行するとされている。このことから時期は晩期後半に求められよう。それら以外の土器も、大まかにはこの時期におさまるものと考えられる。

### 【押型文の施された土器】

66～68は回転押型文が施されているものである。L-59・K-62・64区から一点ずつ出土した。同一個体のもので、いずれも胴部破片である。色調は外面が橙色、内面がにぶい黄褐色を呈する。外面に回転手法による押型文が施され、これは菱目文（あるいは斜格子目文）と称されているものである。胎土は様々な粒径の砂が含まれる。また、繊維混入の痕跡も認められ、割れ口では黒色化している部分が観察される。内面は摩耗しているが、ナデ調整と考えられる。

本資料について、遺失部における他の出土資料と簡単に比較してみる。江別市萩ヶ岡遺跡出土土器、余市町フゴベイ塚出土土器、恵庭市南島松3遺跡出土土器などをとりあげる。



## 1) 江別市萩ヶ岡遺跡出土土器 (江別市教育委員会 1982)

図50の1・2・3の土器である。1は口唇部にも施文がある。1・2は菱形で、3は矢羽根状である。胎土は砂粒を多く含む。内面は研磨される。出土層位からサイベ沢Ⅶ式・萩ヶ岡1式と共伴する可能性が指摘されている。

## 2) 余市町フゴッベ貝塚出土土器 (北海道埋蔵文化財センター 1991)

図Ⅲ-327の217~224の土器である。218は円筒土器下層d2式に相当するものと考えられている破片に連続山形文(矢羽根状文)が施されている。胎土には繊維を含み、内面はナデ調整である。

## 3) 恵庭市南島松3遺跡出土土器 (恵庭市教育委員会 1992)

図52の21~25の土器である。21は、口縁部と器面に貼付部分があり、その上に絡条体圧痕文が施されている。押型文は矢羽根状のものである。内面は平滑に磨かれている。時期は円筒土器上層式の頃とされている。

これら三例の時期については、前期の円筒土器下層d2式から中期の円筒土器上層式のまでにおさまるようである。ルマツプ15遺跡の資料は、押型文が萩ヶ岡遺跡の例に類似し、胎土と内面調整についてはフゴッベ貝塚の例と共通する。このことなどから、本遺跡の押型文の施された土器は、前期前半~中期中頃の時期におさまるものと考えられる。

道内出土の押型文の施されている土器は、いずれも断片的な資料が多く、詳細な研究はこれからという段階にある。しかし、道央部出土の例の中には、円筒土器下層・上層式に関連を求められるものもある。本遺跡の土器にみられる押型文は、通常縄文原体や絡条体で施される地文のかわりに、一時的に使用されたものと思われる。

## 3. 石器について

本調査において検出した石器は83点である。その内訳は、石鏃(ⅠA群)15点、石槍・ナイフ(ⅠB群)6点、石錐(ⅡA群)1点、つまみ付きナイフ(ⅢA群)7点、スクレイパー(ⅢB群)1点、石斧(ⅣA群)37点、すり石(ⅥA群)2点、礫石(ⅦB群)3点である。

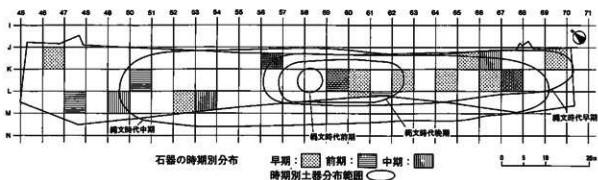
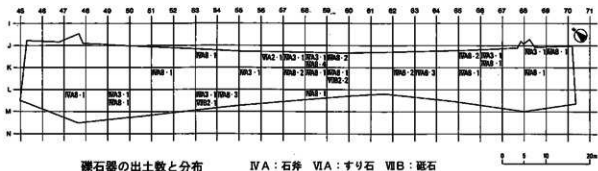
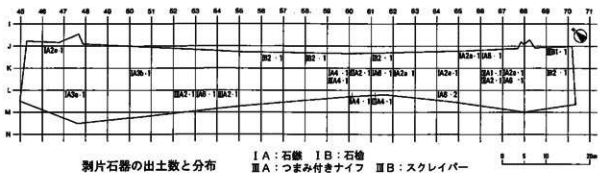
石器は調査区全域から出土しているが、とくに、62ラインから南の平坦部と52~60ライン間の北向き斜面部に多くみられる。器種による分布に差異はみられないが、特定の器種において時期的な出土分布に若干の差が認められる。

各器種の分布は以下の通りである。[図Ⅵ-1]

[石鏃(ⅠA群)] 15点が出土している。器形から、縄文時代早期に共伴すると思われるもの(ⅠA2a、ⅠA4)、前期に共伴すると思われるもの(ⅠA3)、中期から晩期に共伴すると思われるもの(ⅠA6)に細分できる。ⅠA2a・ⅠA4は、一点のみが調査区北端から出土しているが、この他はすべて59~67ライン間の平坦部に分布する。ⅠA3は、調査区北側の斜面部のK-50区、L-47区から出土している。ⅠA6は、K-61・67区、L-53区から出土しておりまともにはみられない。

[石槍あるいはナイフ(Ⅰ群A類)] 6点が出土しているが、すべて小破片のため時期の特定は困難である。

[つまみ付きナイフ(Ⅲ群A類)] 7点が出土している。器形から、縄文時代早期に共伴すると思われるもの(ⅢA1)、前期から中期に共伴すると思われるもの(ⅢA2)、中期に共伴すると思われるもの(ⅢA4)に細分できる。ⅢA1は、一点のみが平坦部に位置するK-66区から出土している。ⅢA4は、調査区中央部のK-59区、L-61区から出土している。ⅢA2は、K-60・66区、L-52区から出土しておりまともにはみられない。



図VI-1 石器分布図

【スクレイパー (Ⅲ群B類)】 J-69区から1点出土したのみである。一般に石べらと称されるもので、縄文時代早期に帰属するものと思われる。

【石斧 (Ⅳ群A類)】 37点が出土している。礫石器の中では、最も出土数が多いが、大部分が器表面の剥落した小破片などである。このうち、残存部位からⅣ群A1類とⅣ群A3類が認められた。Ⅳ群A1類は縄文時代早期に多くみられるもので、J-68区から1点出土している。このほかのⅣ群A3類は、時期の特定はできないが縄文時代の各時期にみられるため、時期の特定には至らなかった。

【すり石 (Ⅵ群A類)】 2点が出土している。器形の特徴から、縄文時代早期～前期に多くみられるもの (ⅥA2) と縄文時代前期～中期に多くみられるもの (ⅥA3) がそれぞれ1点ずつ確認された。Ⅵ群A2類は斜面部のJ-56区から、Ⅵ群A3類は平坦部のK-61区から出土している。

【砥石 (Ⅶ群B類)】 K-59区から2点、L-53区から1点が出土している。すべて板状のもので、縄文時代の各時期にみられ、時期の特定には至らなかった。

剥片石器の石材は、黒曜石・頁岩・メノウ質頁岩がみられる。石鏃・石槍・ナイフは黒曜石、つまみ付きナイフ・スクレイパーは頁岩・メノウ質頁岩の使用割合が多い。礫石器の石材は、緑色泥岩、片岩、蛇紋岩、安山岩、砂岩がみられる。

#### 4. おわりに

石器は縄文時代早期～晩期のほぼ全時期のものがみられる。とくに、分布状況から縄文早期の遺物は60ラインから南の平坦部に、前期は51ラインから北の斜面部に、中期は調査区中央部にまとまりがみられる。土器は縄文時代後期の遺物が検出されなかった。時期的な遺物の分布は、縄文早期は調査区全域にみられるが、とくに中央部58～70ライン間の平坦部に多くみられ、中期は調査区全域に広がり、晩期は調査区中央部の58～61区に集中している。このように、これら土器・石器の分布域はほぼ一致している。また、遺構については出土遺物が少なく、それぞれが個々に立地しているため、時期の特定には至らなかった。

以上のことから、ルルマップ15遺跡は、欠落する時期がある可能性があるが、縄文時代早期から晩期の遺跡である。その主体は、遺物出土数からみて、縄文時代早期後半の東網路系土器群の頃と考えられる。

## 引用・参考文献

- 青森県埋蔵文化財調査センター 1982『発茶沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第67集  
青森県埋蔵文化財調査センター 1983『鶴窪遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第76集  
石岡憲雄 1991『「Tピット」について（再論）』『埼玉考古学論集設立10周年記念論文集』  
恵庭市教育委員会 1988『中島松6・7遺跡』北海道恵庭市発掘調査報告書  
恵庭市教育委員会 1990『中島松5遺跡B地点中島松7遺跡C地点』北海道恵庭市発掘調査報告書  
恵庭市教育委員会 1991『南島松1遺跡南島松4遺跡』北海道恵庭市発掘調査報告書  
恵庭市教育委員会 1992『中島松1遺跡南島松4遺跡南島松3遺跡南島松2遺跡』北海道恵庭市発掘調査報告書  
恵庭市教育委員会 1992『西島松17遺跡西島松18遺跡』北海道恵庭市発掘調査報告書  
江別市教育委員会 1982『萩ヶ岡遺跡』江別市文化財調査報告書XV  
大沼忠春 1986『北海道の押型文土器』『考古学ジャーナル』No.267  
大場利夫・石川徹 1966『恵庭遺跡』恵庭町教育委員会  
小山正忠・竹原秀雄 1967『新版 標準土色帖』  
『角川日本地名大辞典』編集委員会 1987『角川日本地名大辞典』1 北海道 角川書店  
北見市立北見郷土博物館 1983『北見市郷土博物館紀要』第13集  
熊谷仁志 1993『押型文土器の変遷と縄文文化への位置付け』『吉崎昌一先生還暦記念論集先史学と関連科学』  
佐藤宏之 1989『陸し穴瓢と縄文時代の狩猟社会』『考古学と民族誌 渡辺仁教授古稀記念論文集』六興書房  
札幌市教育委員会 1975『N309遺跡』札幌市文化財調査報告書XII  
札幌市教育委員会 1977『S267・268遺跡』札幌市文化財調査報告書XIV  
札幌市教育委員会 1977『S265・263・262・269・266遺跡』札幌市文化財調査報告書XV  
札幌市教育委員会 1978『S411遺跡』札幌市文化財調査報告書XVIII  
玉島左太夫 1857『入北記』巻七 稲葉一郎解説 1992『蝦夷地・樺太運使日誌入北記』北海道出版企画センター  
知里真志保 1956『地名アイヌ語小辞典』北海道出版企画センター  
北海道文化財保護協会 1996『千歳市ボンオサツ遺跡ケネフチ5遺跡』北海道文化財保護協会調査報告書第2集  
北海道文化財保護協会 1996『千歳市オサツ15・16・18遺跡』北海道文化財保護協会調査報告書第3集  
北海道埋蔵文化財センター 1983『千歳市ママチ遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第9集  
北海道埋蔵文化財センター 1987『千歳市ママチ遺跡III』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第36集  
北海道埋蔵文化財センター 1989『美沢川流域の遺跡群XII』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第58集  
北海道埋蔵文化財センター 1989『深川市納内3遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第60集  
北海道埋蔵文化財センター 1990『美沢川流域の遺跡群XIII』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第62集  
北海道埋蔵文化財センター 1991『清水町上清水4遺跡・共栄2遺跡共栄3遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第70集  
北海道埋蔵文化財センター 1991『余市町フゴッペ貝塚』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第72集  
北海道埋蔵文化財センター 1996『千歳市ユカンボシC9遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第100集  
北海道埋蔵文化財センター 1996『高岡1遺跡③・高岡2遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第106集  
松浦武四郎 1858『西蝦夷日誌』吉田常吉編 1984『新版蝦夷日誌（下）』時事通信社  
森田知忠・遠藤香澄 1984『Tピット論』『北海道の研究』考古編I 清文堂  
山田秀三 1965『札幌のアイヌ語地名を尋ねて』繪書房  
渡辺 茂 1979『恵庭市史』

写 真 图 版



1. 調査前状況



2. 調査区西側完掘状況



3. 全完掘状況



1. 包含層調査状況



2. 包含層遺物出土状況



3. K~M杭間土層断面



4. 46~48杭間土層断面



1. TP-1・2 完掘



2. TP-3 完掘



3. TP-1 土层断面

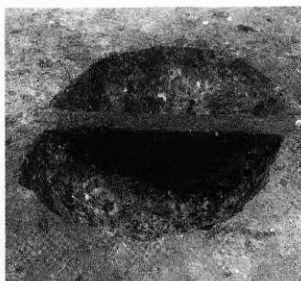


4. TP-2 土层断面





1. P-1 完掘



4. P-3 土層断面



2. P-2 土層断面



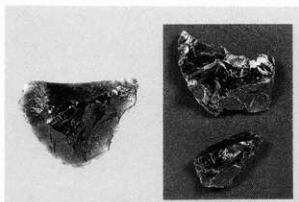
5. P-3 完掘



3. P-2 完掘



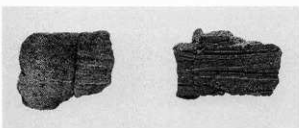
6. F-2 焼土断面と範圍



2. F・C-1 出土の石器



1. TP-1・3 出土の土器



8. 包含層出土の土器(I群)



3(上)・4(下). 包含層出土の土器(I群: 同一個体)



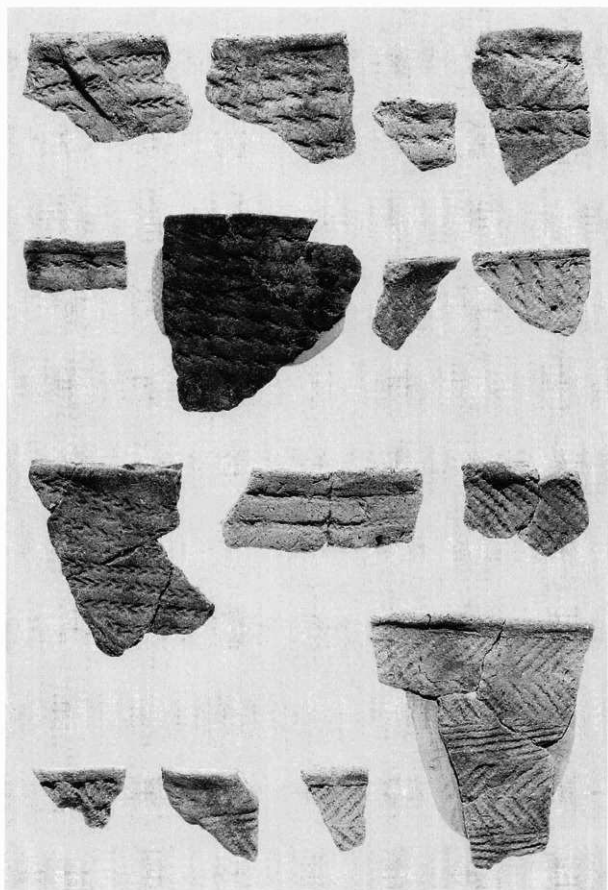
6. 包含層出土の土器(I群)



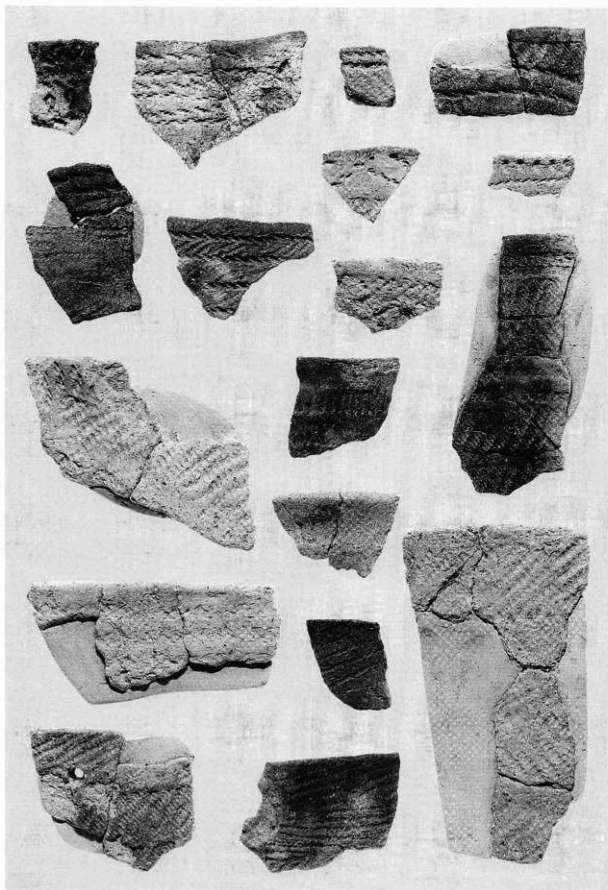
5. 包含層出土の土器(I群)



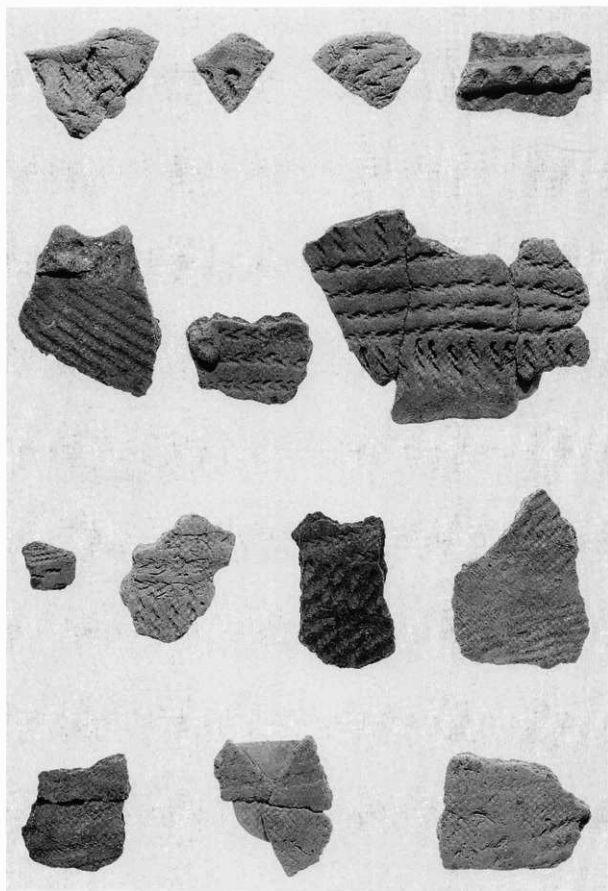
7. 包含層出土の土器(III群)



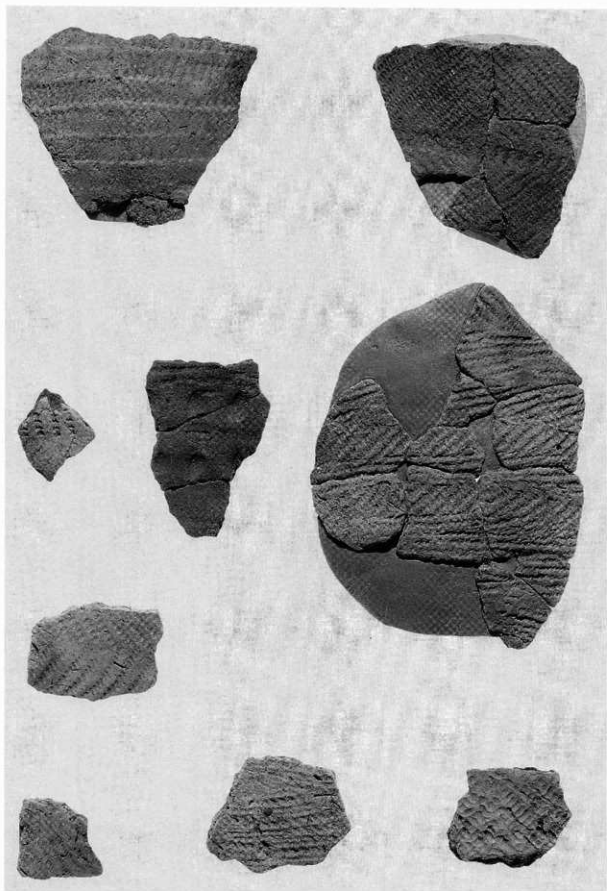
包含層出土の土器(I群)



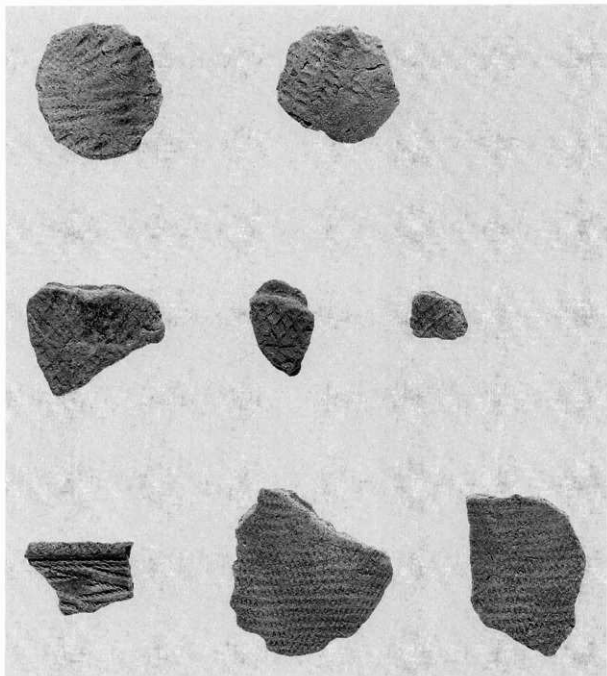
包含層出土の土器(1群)



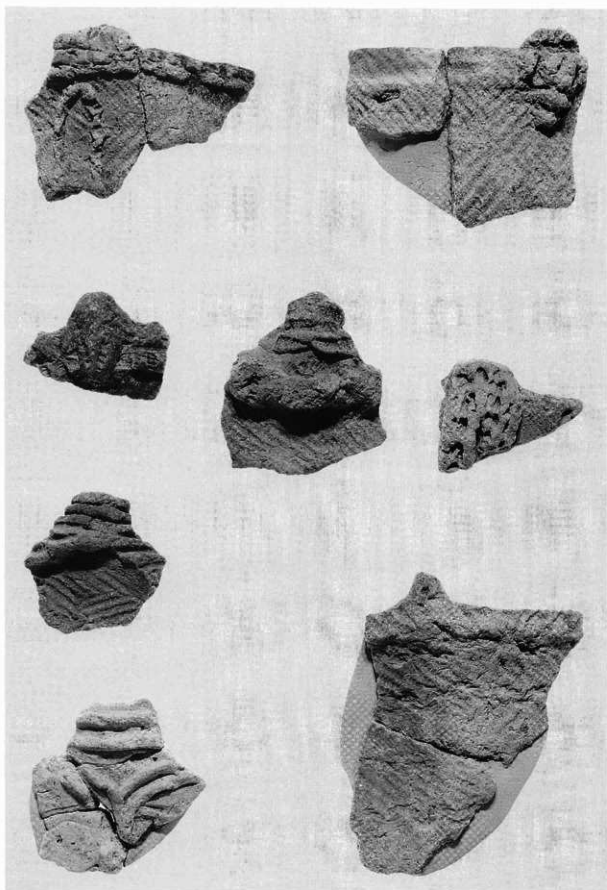
包含層出土の土器(I群)



包含層出土の土器(1群)

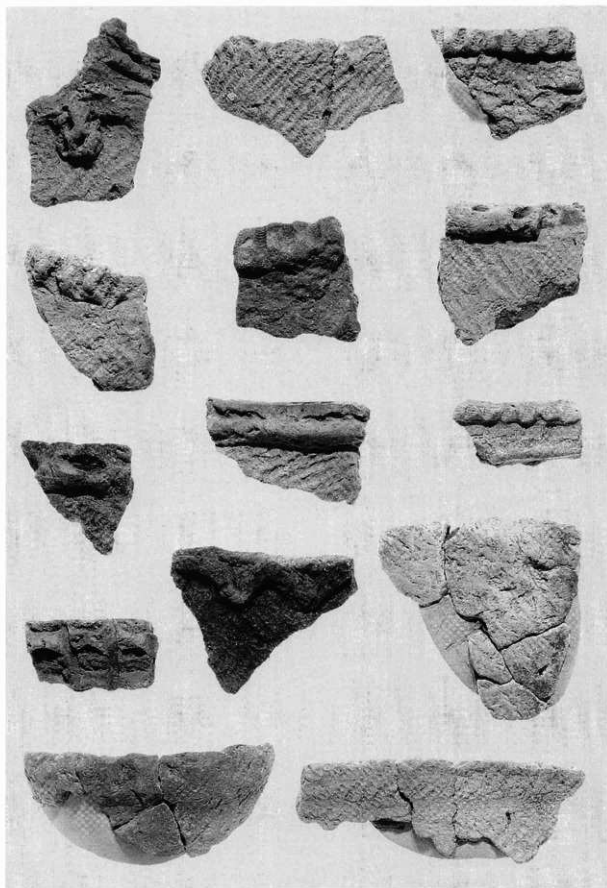


包含層出土の土器(I：土製円盤・押型文土器・II群)

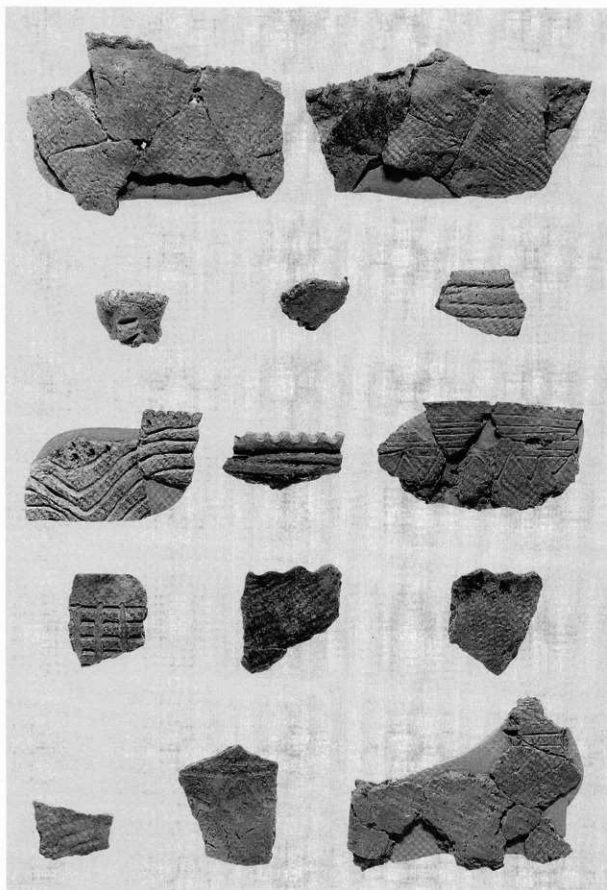


包含層出土の土器(Ⅲ群)

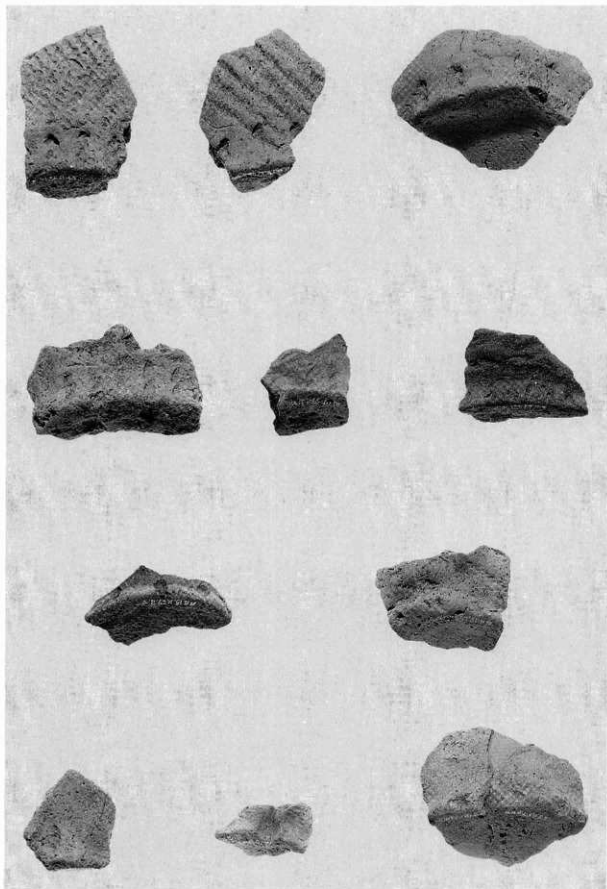




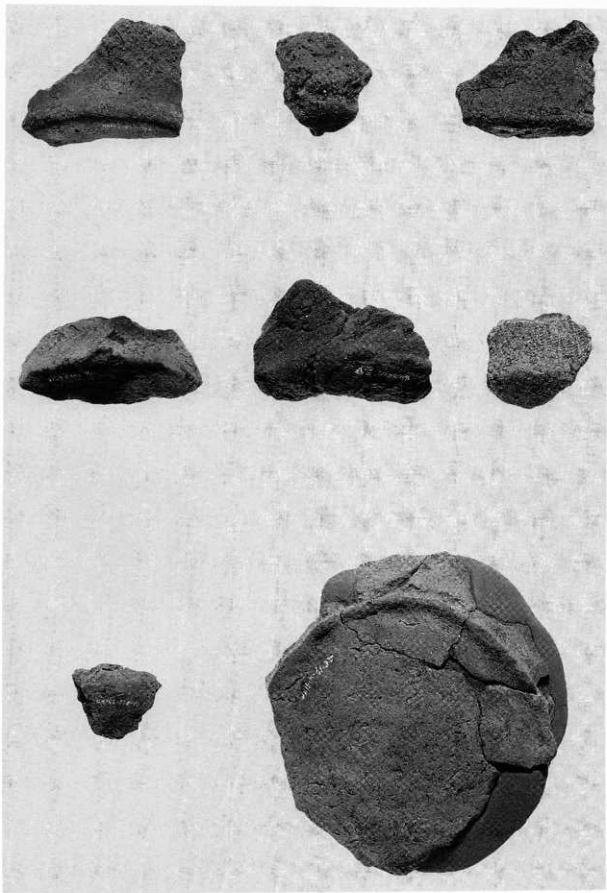
包含層出土の土器(Ⅲ群)



包含層出土の土器(V群)



包含層出土の土器(I群)



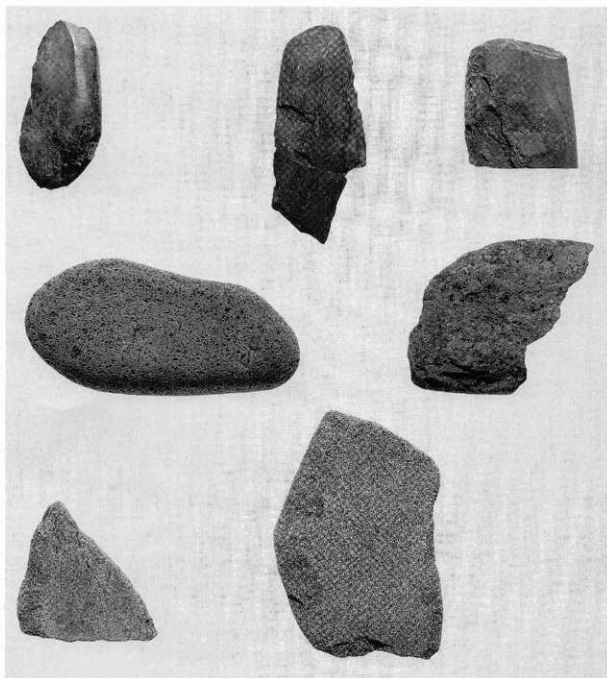
包含層出土の土器(Ⅲ・Ⅴ群)



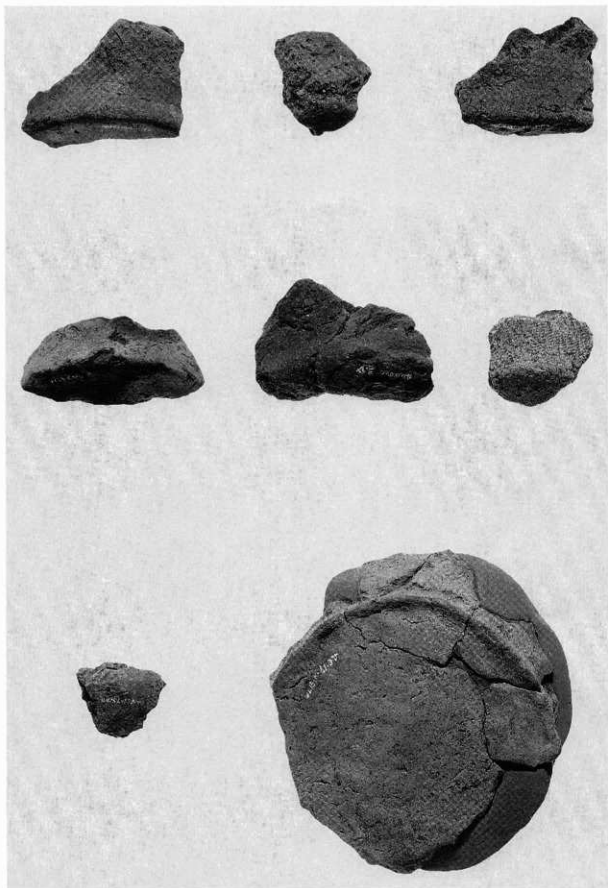
1. 包含層出土の石器(石鏃)



2. 包含層出土の石器(石鏃・つまみ付き、  
ナイフ・スクレイパー)



3. 包含層出土の石器(石斧・すり石・砥石)



包含層出土の土器(Ⅲ・Ⅴ群)

## 報告書抄録

ふりがな	ヌカホシ							
書名	恵庭市ルルマップ15遺跡							
副書名	一般国道36号恵庭市恵庭バイパス工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	㈱北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号	第118集							
編著者名	立川トマス・末光正卓・山中文雄							
編集機関	㈱北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒064 北海道札幌市中央区南26条西11丁目 TEL 011-561-3131							
発行年月日	西暦 1997年 3月25日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ルルマップ15	ほっかいどうまにわし 北海道恵庭市 にししままつ 西島松598-7	012319	A-04-114	42度 54分 40秒	141度 33分 00秒	19960917 ~19961031	1700㎡	道路(恵庭バイパス)建設工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
ルルマップ15	散布地	縄文時代 早期 中期 晩期	落とし穴 土 壇 焼 土 フレイクチップ集中	3基 3基 2か所 1か所	縄文土器 石器等	4552点 4610点	押型文が施された土器 3点 円筒土器下層d2式 3点	

北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第118集

## 恵庭市 ルルマップ15遺跡

一般国道36号恵庭市恵庭バイパス建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成9年3月25日 発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒064 札幌市中央区南26条西11丁目

TEL (011) 561-3131

FAX (011) 561-0458

印刷 誌キ サ ツ

〒064 札幌市中央区南21条西10丁目

TEL (011) 531-2111